
妖犬友人帳

あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖犬友人帳

【Nコード】

N9513W

【作者名】

あや

【あらすじ】

時は現代 殺生丸とりんの娘である月詠は後を継ぐために、そして強くなるために
殺生丸の牙でできた刀 天響牙を腰にさし 阿吽とともに旅に出た。
そんなある日 月詠は妖の見える人間の少年と招き猫と出会う。

第1話 出会い

とある田舎 高校生が走っていた。ジョギングしているわけではない。追いかけられているのだ。

人には見えない妖にだ・・・

「ぜえ・・・ぜえ・・・ニャンコ先生め・・・後で覚えとけよ・・・」
高校生の少年、夏目は息を切らしながら自称用心棒に愚痴を零す
「レイコく友人帳よこせ」

「うわっ!？」

妖の手が伸びる・・・もうだめかと思ったその時だった

ザシュツ

「ぎやああああああああ」

「え？」

なんと妖の方が傷ついたのだ。夏目は慌てて後ろを振り向いた。そこには自分ぐらいの女の子、
でもただの女の子じゃなかった。だって側には鞍と轡と手綱をつけた双頭竜、
服装は水色の花の模様が入った白い着物に青い袴を履いており、白銀の毛皮を羽織っていた。

手には異様な雰囲気のある刀があり極めつけは金の瞳、白銀の長髪、頭の犬耳だった。

そして彼女は言う

「人を傷つけるのなら容赦しないわよ」

その睨みは怖かった

「ひいひいひい」

妖が去っていた後彼女は刀を鞘に納めた

「大丈夫？ 災難だったね」

「あっ・・・ありがとう・・・俺は夏目。君は・・・妖？」

夏目は疑問に思ったことを聞いた。すると彼女は答える。

「私は月詠、この子は阿吽よ。半妖なの」

「・・・半・・・妖・・・」

ガサッ

「片方が妖でもう片方が人間ということだ」

「ニャンコ先生ってどこいったんだよ！？ 大変だったんだぞ！！」

そこに現れたのは饅頭のごとく丸々太った・・・猫だった。
月詠は思わず

「・・・猫？」

「猫じゃなあっていってこれでも上級な妖だぞ！！」 「いっ一応本来の

姿は妖らしいけどね……」

「……なるほど……スンスン……たしかにそんな匂いがするわね」

月詠はニャンコ先生を持ち上げて匂いを嗅ぐ

「月詠って犬の半妖なのか？」

「そうだよ、お爺さまと父上が犬の大妖怪なのっ強くてかつこいよー」

その言葉にニャンコ先生は興味を持った。

「ほう……どんな名のだ」

「お爺さまは鬨牙王で父上は殺生丸よ」 「何い!？」

「ど……どうしたんだよニャンコ先生」

「そいつらはまさに西国を治める大妖怪、犬妖怪の王と言っても過言でもないわっ!！」

「ええっ!！」

「そうだね……お爺さまはその実力と心の広さで慕われていたらしいし、父上は力は受け継いでいて勝負になると本当に強いからね」

「でもどうして君たちはここにいるの？」

「さっきの通り父上は西国を治める大妖怪、唯一の子である私が継

ぐんだけど……」

「なるほど半妖だと人間よりは強いが妖より弱い、だから修行に来たのだな？」

「ええ……ここにはたくさん妖がいるわ……だからできる限り強くならないと……この天響牙と阿咩と一緒にね」

そういうながら刀を握りしめた。

「天響牙？」 「妖刀だな」

「私が生まれたとき父上が自分の牙で刀を作って欲しいって刀鍛冶妖怪に言ったの……それが天響牙よ」

「先生、妖の牙で刀ができるものなのか？」 「特殊な技が出せるがな」

「そんなわけで当分ここに暮らすからよろしくね」

「ああ……よろしくな」 「よろしくするなら七辻屋の饅頭な」

こうして夏目達は出会った。この出会いが今後どうなるかまだ誰も知らない。

第2話 ツユカミ

星の綺麗な夜だった。月詠は阿吽に乗って夜の散歩に出かけていた。

「綺麗ね、阿吽」

「ぎゃう」

夜の散歩を楽しんでいたそのときだった。

「！」

「どうしたの？ 何かあった？」

とりあえず月詠は阿吽の行きたがっている方向に進んでみた。でもそれが災難だったかもしれない。

「出て行け酔いどれ中年妖怪共！！！！」

「中年！？」「ひゃー」

「！」

耳に響く夏目の怒声とニャンコ先生・・・・・・・・と翁の面を被った小さな妖が飛んできたのだ

月詠は慌ててキャッチする。

「なっ夏目！ 一体何が・・・」

「えっ月詠！ 阿吽！・・・なんでここに」

どうしているのか聞いてみると阿吽が行きたがり行ってみると夏目の怒声とニャコ先生達が飛んできたと説明した。

「そうだったのか・・・阿咩もごめんな・・・実はちょっとしたわけがあったんだ」

夏目はこの小さな妖ツユカミの名前を返すため友人帳を開いた。
名前はあったのだが祖母レイコのせいでもう一枚ひっついていて無理にとれない。

だからひっついていてる奴の名前と同時に返さなくてはいけない。
今日は遅いので明日に備えて寝ようとしたが二人が酒盛りし始めたのだ。

しかも夏目の上で・・・

「怒るのも無理もないよ」

「なんだとおっ」

「とにかくわたし達も手伝うよ 夏目寺子屋もあるでしょ？」

「ありがとう月詠」

「恩にきるよお嬢ちゃん」

こうして夏目達の妖探しが開始された

第3話 ツユカミ

「こっちじゃ お嬢ちゃん、この七つ森の奥の祠に私は住んでるんじゃ」

そう言いながらツユカミは月詠と阿吽を案内する。

夏目は学校なのでニャンコ先生と一緒に居なかった。

そして二人は夏目達が来るまでの間、レイコが名前を奪った妖はどんなのかを話したりした。

しばらくするとお上品そうなおばあさんが歩いてきた。

おばあさんは水の入ったガラスのコップに一本の花を生け、蜜柑を一つ供え

手を合わせた。彼女が帰った後月詠は聞いてみる

「誰？あのおばあさん」

「ハナさんじゃよ、彼女は小さい頃からよくお参りに来てくれてのう」

ツユカミは本当にうれしそうに話した。唯一ここにお参りする方らしい。

すると遠くから夏目とニャンコ先生が現れた。

ツユカミと月詠は祠の近くでこっちこっちと手を振るが夏目は青ざめた。

「祠に住んでるって………あんた神サマだったのか!？」

青ざめるのも無理も無い、昨夜の無礼三昧……崇られる……かと思いきや

ツユカミは笑いながら言った。

「いやいや そう呼ばれているが元は祠に住みついた宿なしの物怪だよ」

彼が言うには昔旱魃が起こり村人は祠に祈った。次の日偶然雨が降った。

村人達は露神と崇め自身も力に溢れ、姿も立派になったそうだ。

……でも信仰薄れるにつれて縮んだのだ。今はハナさん一人だけだろう。

すると夏目はコートのポケットからある物を出した。それは蜜柑だった。

「……蜜柑あげようか」

「ふふ、蜜柑はもうあるよ」

そう言いながらハナさんから貰った蜜柑に触れる。

「さっきそこで上品そうなおばあさんに会ったよ その花と蜜柑はあの人が？」

「おお ハナさんというんだ ここに拝みに来てくれる人だ」

「よく来るんだって」

ツユカミと月詠の言葉に「へえ」と答える夏目だった。

場所は代わって夏目の家、ツユカミは自分の体には大きい筆を持ち似顔絵を描くそうだ。

ちなみに例の妖怪は友人帳で呼べないらしい。顔も名前も知らないから・・・

そして似顔絵が完成したのたが・・・・・・・・

「名は忘れたがこんな奴だったぞ」

言うならば腹に参の字が書かれたキュウ太郎だった

「・・・わたし知ってるオバケのキュウ太郎!!」

思わず叫んでしまう月詠 夏目達は冷静に言った

「・・・毛は無かったの？」

「毛は無かったの」

「これあてにしているのか？」

「これしかあてにできないの」「できないね」

「・・・でこのキュウ太郎はどこ沼に住んでいるんだ？」

「いや、そいつは水妖怪ではなくて 三ノ塚の山に住んでいたぞ」

「「ぷっ」」

もう三人は限界だった。

「ぶはははは」

「あはははははは おっ・・・お腹があ・・・」

「うひゃひゃひゃひゃ」

「お前さん達・・・」

その日から三ノ塚でキュウ太郎（仮）探しが始まった

夏目とニャンコ先生は近くに住む妖達に全然似てない似顔絵見せながら見たことないかと聞く。

ツユカミは鳥に、月詠は阿吽に乗って探したり、時々夏目はレイコに間違われて襲われて大変だった。

そしてある日 いつものように月詠は阿吽とともに探していたその時だった。

「おじょーちゃん！見つけた！キュウ太郎が見つかったんだ！」
ツユカミは大きい声で見つけたことを知らせる。月詠は急いで聞いた。

「どこなの！？」

「三ノ塚におったわい、とにかく夏目達も呼ぶぞ」

「わかった 阿吽に乗って こっちの方が速い」

月詠とツユカミは阿吽に乗った後 ものすごい速さで夏目の家に向かった。

コンコン

「夏目、夏目」

「月詠 ツユカミさま」

「夏目、見つけたぞ」

ようやく見つかった。夏目達は用心のため丸鏡持って三ノ塚の山に行くことになった。

三ノ塚についたが逃げた後だった。でもまだ遠くへは逃げてはいないはず

夏目は分かれて捜すかと言い出したそのときだった。ニャンコ先生と月詠が何かを感じ取った。

やばいのがくると・・・

「何！？そんなのかまっていたらキュウ太郎に逃げられる・・・ニャンコ先生、頼めるか？」

「喰ってもいいなら」

「妖怪も食べるのか・・・・・・？」

「わたしもキュウ太郎の臭いさえわかれれば捜せるのに・・・」

「・・・臭い？」

ツユカミが言うには陰を伝って移動する妖だそうだ。ふと瞬間だった

「まいりました」

遠くの木の下に妖が現れた。参りましたと言いながら・・・

第4話 ツユカミ

「まいりました」

木陰に妖がいた。夏目と月詠はなんだと思う。

「まいりました」

いつの間にかその妖は近くの木陰に居た。夏目はゾツと寒気がした。次の瞬間その妖は消えた。……消えた……そう思ったその時だった

「まいりました」

夏目達の立っている木陰に現れたのだ。すると夏目は気づく……妖の腹にキュウ太郎の一番の特徴である参の文字あったのだ。

「こいつがキュウ太郎!？」

「そう! あいつ!!」

「似てないっ! 全然似てないわ!!」

「ヘタクソ!!」

ニャンコ先生はそう言いながら攻撃しようとするが

ばしんっ 「ぎゃっ」

返り討ちにされてしまった

夏目と月詠はツユカミに言われて鏡の反射光で目眩ましをしようとするが妖に捕まってしまった。

でもそのとき、夏目の頭に何かが入り込んだ。それはこの妖と祖母

レイコの出会いだった。

「夏目」

「う……先……生……月詠……」

「さがれ」

「くらえっ！」

「ぎゃあ」

ニャンコ先生と月詠が作ってくれたスキをつき夏目は妖とツユカミの名を返す

ぱんっ

二人の名が書かれた契約書を銜えて言った

「「ススギ」「ツユカミ」名を返そう」

ふっと二人の名が書かれた契約書に息を吹き込むとしゅるしゅると名前がススギとツユカミに入っていた

こうして二人の名は無事に戻った。しかし翌日ツユカミの元へ行ってみるとツユカミはさらに小さくなっていた。

唯一信仰してくれたハナさんが逝ってしまうのだ。彼女が逝けば彼は消えてしまうらしい。

夏目と月詠は代わりに自分たちが信仰する、毎日来ると言った。でもツユカミは「これでいいんだ」と言った。

「ありがとう夏目、月詠嬢ちゃん、斑、阿吽」

露神は消えていった。空から雪が降る……。明け方まで……。
・彼はハナさんに会えただろうか……。・

そして夏目ずっと雪の中に立っていたので熱を出した。ニャンコ先生に今ならパクツといけるといわれ、体はだるいはずなのに大げんか勃発、当然塔子さんに怒られた。すると

ガラッ

「お見舞いにくたよー大丈夫」

「月詠っ！……阿吽！……」

「実は犬妖怪一族に伝わる薬持ってきたんだっ！私も風邪引いた時は飲んだし、これさえあれば一発だよ！」

「あ……ありがと……」

夏目はお礼をいいながらその薬を飲もうとしたその時だった。

「まっまてい!! 夏目」

ニャンコ先生は慌てて止める

「え?」 ごくん

「ぐはっ!?!」

どさっ「夏目!?!」 夏目は倒れてしまった。妖たちの薬は

苦い薬草 妖の生き肝に 毒蛇の生き血

良く効くのだがまずすぎて良薬は口に苦し以上なのだ。

「わーっ夏目ーっ!!」

夏目の熱は治ったが違う意味でしばらく寝込んだとき。

第5話 八ツ原の怪人

「♪」

天気の良いある日、月詠は阿吽と散歩していた。まだ寒い運動すれば温かいからだ。

するとどこからともなくドンドンと太鼓を叩く音と「そのけーそのけー」という声、そして「やめろー」と怒る夏目の声だった。そこには通学途中の夏目、しかし前には太鼓を叩く一つ目妖、後ろには紅い番傘をさした牛妖怪がいた。

月詠は思わず話しかけてしまう

「何やってるの？夏目」

「……………月詠助けてくれ」

何でも二人が住む八ツ原に妖怪退治きどりの人間が現れたらしい。そこで噂に名高い夏目にそいつを退治してもらおうした。当然、夏目は断ったのだがこの後が大変だった。

誠意を見せるため送り迎えすると言い出したのだ。

「……………わかった。邪魔しないように彼ら見張るから」

「ありがとう」

夏目は月詠に心から感謝した。

ざわざわ

「おはよー」

「ほおーこれがガツコウですかあ」

体育の時間

「夏目様ー」「がんばれー」「ほらほら邪魔しないっ」

がりがり

「「きゃっきゃっ」「（あいつら・・・）」

二人は地面に大きく呪と書いていた。そのときだった。

「こらあっ」

ドコッバキッドスッゴスッ

月詠が父親ゆずりの拳骨を喰らわせたのだ。夏目は思わず青ざめた。

「（何やってんだか・・・）」

ふと夏目は何かに気づく。少し離れた所に自分と同じように窓の

外を見る黒髪の男子がいたのだ。

すると男子もこっちに気づいたのか目が合った。そして男子はにや・
・と笑い

教室に入っていた。

「(・・・何だ？この感じ・・・)」

夏目はそのように思った。

第6話 八ツ原の怪人

放課後・・・まだいる一つ目と牛に夏目は話だけは聞くとはいとうとう降参した。

妖怪退治きどりの人間はいつも突然強力な霊波を放つので姿は見れないらしい。

人の匂いはするようだが・・・

夏目は思う、妖怪のせいで周りになじめない人なのか・・・と

「わからなくもないな」

「？」

その時だった。

にゅうと足に伸びる長い手、それを皮切りにたくさん的小妖怪が現れ、

夏目と月詠に襲いかかる。

「人間だ」

「人間がいるぞ」

「おのれ人間め」「我らを追い出しに来たか」

「わ・・・違・・・」

「ちよっ・・・放してっ」

「ニャ・・・ニャンコ先生ーーーーーっ」

「やめなさーーーーーいっ!!」

ピシッ なんだか空気が変わった。

「来た 奴だ」

「夏目つかまれ」

カツ

「ニャンコ先・・・」ニャンコ先生は本来の姿になると夏目を乗せて木の天辺まで飛んだ。

月詠も阿吽に乗り空に避難した。

ほかの皆はなんとか逃げられた様だ。月詠の耳と鼻でわかったことだ

とにかく夏目の答えは

「とりあえず相手の顔は拝んでみたい。」

少したったある日、夏目とニャンコ先生が歩いていた。月詠は話しかける。

すると夏目は有力な情報を話した。

「実は同じ学校の田沼って奴が妖見えるらしいんだ・・・八ツ原近くに住み始めたらしいしな」

「なるほど・・・たしかにその田沼って人みたいよね」

そしてしばらく歩くとそこにいたのは黒こげの中級妖怪、一つ目と牛だった。

「夏目様・・・月詠様・・・」

「わっどうした中級!!」 「黒こげじゃないっ!!」

「くらってしまいました まともに・・・」

二人がいうには退治人はまだ森の中だそうだ

夏目は思う

どうしてこんなことが出来るのか・・・と

第7話 八ツ原の怪人

とにかく夏目達は田沼らしき退治人を追うことになった。

しかしそのとき、しゃんしゃんと鈴の音が何処となく鳴った。現れたのはバカでかい馬のような妖だったのだ。

「（でかっ！！）」夏目と月詠は心の中で思う。

なんでもこの妖も名を返して貰いに来たようだった。

でも、あいにく立て込んでいる。ニャンコ先生が勝手に

「人退治の算段をしている」と言った。

すると妖・三篠はお手伝いすると言い出した。

「それに先刻 私の家来が主に助けてもらったそうで」

そう言って見せたのは一匹の三本線のかわいい蛙だった。

夏目とニャンコ先生には見覚えがあった。

「あ、三本線の蛙・・・」

「・・・かわいいいわね・・・」

「良いことはしとんだな夏目」 「先生は黙っててくれ」

すると黒こげの中級たちは夏目の敵が森に潜んでる、ご成敗を！
！と言ってしまったのだ。

「承知」三篠は一気に飛んでいく。夏目達は慌てて追いかけた。

夏目はどこだ 早く見つけないと 走りながら焦る。すると人影が見えた。

きっとあれだろうと思ったそのときだった。

「夏目っ！上！！」 「！」

月詠の言葉に上を見ると三篠が今にも人影を襲いかかろうとしていた。

夏目は身を挺して庇うように抱きつく

ニャンコ先生は叫んだ

「！ 夏目命令しろ 奴の名を！！」

はっ

「止まれミスズ！！」

何も痛くない・・・夏目は目をゆっくり開けると三篠は

「ぐ・・・・・・」

止まっており、そのままずしんと地面に倒れた。まるで月詠の叔父、犬夜叉のおすわりみたいだ。

とにかく無事で良かったと胸をなでおろす。すると

「・・・一体どうしたんだね少年」

田沼ではなく眼鏡をかけたお坊さんだった。

「おい」

「「！」」

「お前達、もう一度包み隠さずきちんと話してみてくれないか」
「嘘ついたら本気の毒華爪喰らわすわよ」

先ほどのお坊さんは新しく来た廃寺のお坊さんで性格は勤勉、しよっちゅう払いに
来るようになった。そして霊力も強いので夏目の力で退治しちゃえと
考えたらしい。その言葉に夏目と月詠は呆れる……。

「お、お前達ねえ……」 「……馬鹿みたい」

「ひい申し訳ございません!!」

「これ、少年さっきから何をひとりで喋っているんだい？」

「「「（え!?!）」」「」」

お坊さんは説明した。自身の息子が敏感で体を壊すと……な
のに周りには
妖が出ると有名なので気休めにお清めしていたのだ。

夏目の後ろで「見えぬとは!!」とぺちやくちや喋る中級たち

ニャンコ先生は修行で身に付いたのだろと言った。

夏目は苦笑いしながらほどほどしてやってください。と言った

お坊さんは見えているのかねと聞いた。夏目は無言になってしまった。しかしそんな彼にお坊さんはもう何も聞かず、やさしく言ってくれた。

夏目は思わず名前を聞いてしまう。

「……………ご住職お名前は？」

「ああ私、姓は田沼と申します。」

お坊さんは田沼のお父さんだった。

翌日、学校で中級たちが扇子を振り、月詠と阿吽が注意する。その様子を田沼が見ていた。

「見えるのか？」「え……………」

「グラウンドに変な物でも見えるか？」

夏目の問いに田沼はもう一度窓の外を見て　フツと笑った。

「いや。でも一瞬何か変なものの影がみつつ見えたような気がしたんだ

何故かだけど……………透けてだけど犬耳の女の子が見える」

田沼は夏目に話しかけたかった様だ。自分と何かが見える夏目にそんな彼に夏目は言った。

「俺は見える　すごく変なもの。でも内緒な。」

やっぱり おれ達二人が変なのかもしれないし。」

「・・・・・・・・そうか・・・・・・・・そうだな・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」
「そうだな」

田沼も夏目もうれしそうだった。

「・・・・・・・・あ・・あの犬耳の女の子は月詠って言って父親が犬妖
怪、

母親が人間の半妖なんだ。良い奴だし見えるんだったら田沼もきつ
と仲良くなれるさ」

「ああ・・楽しみだな」

夏目の紹介で月詠と田沼が出会うのは放課後のことであつた。

第8話 ダム底の燕

月詠は嫌な予感がしていた。夏目の近くにニャンコ先生以外の妖の臭いがしたからだ。もしかして取り憑かれているのかと思い、阿吽を連れて

会いに行くと鳥の字をくずして書かれた布製のお面をつけた女性の妖が

夏目の隣にいた。

「……………取り憑かれた？」

「……………探し人がいて人間である俺といれば

もしかしたら見つかるかもって……………」どんよりとした空気で説明する夏目。

人探しする妖はどんな人を探しているのかを夏目と月詠に言った。

「顔を見ればわかるのですが詳しくはわからないのです」

「……………」

「わかっていることといえば二葉村に住んでいた「谷尾崎」という名の男

だったことくらいです」

「二葉村ってお前が住んでいるダム底のに沈んでた村のことか？」

「はい」

しかし村が沈んだのは二十年前、長期戦覚悟だった。

翌日学校……………

夏目はジュース飲みながら何気なく北本に聞いてみた。

「なあ北本、二葉村って知っているか？」

「ん？おれの父ちゃん二葉村の出身だけど？」

「「「（ええ！？）」「」意外な情報に三人はびっくり、
夏目はとうとうぶっとジュースを吹き出してしまった。

北本が言うには二葉村の者はほとんどこの辺りに越したらしい。
しかも谷尾崎の名は聞いたことあるし今夜住所聞いてみるといつて
くれたのだ。

放課後・・・帰り道

「意外とすぐ見つかったね」「よかったな」「はい」

そして彼女は嬉しそうに笑う

「ふっふふふふふふ」

「・・・・・・・・」

「あ、夏目様。月詠様」

チュンチュン

「すずめ」「ふふっかわいいね」「・・・おー」

しかし すずめはバサバサと飛んで行ってしまった。

「「あ」」

「あーあ」ちょっと残念そうに声を上げる妖……でもその後を「ふふ」と楽しそうに追いかけた。

やっぱりダム底の外の世界が楽しいんだ……。と月詠は思った。すると妖はあることを聞いて来た。

「夏目様と月詠様はきょうだいいますか？」

「いや、残念ながら血のつながった身内はもうひとりもないんだ」「私はきょうだいはいないけど、お婆さまと父上がいるわ」

二人の答えに妖は

「そうですか」「お前はいるのか」「はい4人」

「でも皆わたしのせいで死にました。」

今度はこんなことを聞いて来た。

「夏目様、月詠様 手をつないでもいいですか?」

さびしいのがわかったのか夏目は無言のまま、
月詠は笑顔で彼女に手を差し出す。

彼女は嬉しそうに二人に手を伸ばした。

「つめたい手だな」「はい」

でも月詠にはわかっていた。
本当はつめたくて気持ちがいいと言いたかったと・・・

「あ、夏目様、月詠様 雨が来ます」「え?」「解るんです」

「雨を予言する・・・鳥 そうかお前、
もとは燕だったんじゃないのか?」

「はい そうだったかも知れません」

「それじゃあこれからは燕って呼んだほうがいいかな?」

月詠の言葉に夏目も同意する

「ああ・・・良い考えかもしれない・・・」

「・・・・・・・・はいっ！」

彼女・・・・・・・・燕は一段と嬉しそうに答える

その後 迎えに来たニャンコ先生に三人の手をつないだ姿を突っ込まれたのはいうまでもない。

夜 燕が言った通り 雨が降った。

その雨はすぐにあがった。・・・・

第9話 ダム底の燕

翌日、北村のおかげでようやく谷尾崎の住所が割れた。

よけいな者まで着いて来たが燕は急に走った。

「あの人の匂いがする」と

しかしニャンコ先生の余計な言葉で夏目と月詠は慌てて止める。

そのせいで燕はびたんと転んだ。当然怒る「タヌキだるま」と言いながら

対してニャンコ先生は「B級妖怪」と言った。

そんな二人に呆れながら夏目は聞いた。

「燕、とにかくなぜ逢いたいのか話してみてくれないか？」

燕は妖になる前は鳥の雛だったらしい。でもある日巢から落ちてしまった。

だが、やさしい人間が巢に戻してくれた。なのに彼女に「人間の匂い」が

ついてしまい、親鳥は巢ごと放棄してまった。

きょうだいの命は消えてしまい気づいたら彼女は妖になっていた。

ある日繁みの中で動けない彼女にエサを置いてく人間が現れた。それが谷尾崎だった。彼は野良犬と勘違いしていた。

燕は毎日エサを持ってくる彼に

巣へ戻してくれた人間のあたたかさを思い出してくれたのだ。

「村が水底に沈んだ時、心静かに眠れたのはあの人のおかげなのです。」

夏目たちはだから逢いたがっているのかと思った。

恩人と言えようその人に……

「あ」

たっ

燕は走った。前を歩いているのは四十代くらいのワイシャツにネクタイしめた男性。おそらく彼が谷尾崎だろう

燕はしっかりと彼の顔を見た。うれしそうに

夜……燕は心からお礼を言った。でも夏目はため息つく

「村がまた水没するまでいてもいいぞ」

「……私も同意見」

それから毎日谷尾崎を見に行った。言葉を交わせない、相手は見えないが

燕はうれしかった。

そんな夜のことだった。

森のむこうが騒がしかった。阿吽を引き連れ行ってみる。

そこには夏目と本来の姿のニャンコ先生・・・巨大化したダム底の妖垂申だった

「騒がしいわね、なにやってるの？」

「つ・・・月詠 実はふたば祭りの競争の賞品が一晩だけ人間になれる浴衣なんだ!!」
それさえあれば燕も谷尾崎さんもちゃんと逢えると思って・・・」

「・・・なるほど・・・だったら私も誘ってよ

一人より・・・ふたりでしょ？」 「・・・あぁっ」

「ああーっ！お前もかよ!! 月詠!!」
「ニャンコ先生うるさいー」 「うるさいぞっ」

こうして二人は競争に参加することになった。

夏目は垂申が作ってくた布製お面をつけてだが・・・

月詠は持ち前の脚力でどんどん先に行く。夏目に人間のため妖たちに玩ばれている感じた。

ニャンコ先生は見てられんという感じで元の姿に変化した。

「蹴ちらすぞ夏目！こい！！」

夏目は急いでニャンコ先生の背中に乗った。

そして一気に先頭チームに追いつく。その中に月詠もいた。

「夏目っ」

一本杉に着くと月詠はなぜかニャンコ先生に乗り、夏目の襟を掴んだ。

「え？」

「浴衣まで投げるわっ齒あ食いしばって！！」

「えっちよっ・・・待っ」

「でやああああああああ！！！！！！」

「ぎゃああああああああ！！！！！！」 「ほうやるなー」

月詠は浴衣まで夏目を投げた。当然夏目は悲鳴をあげる。その時だった。

ぱしっ

「・・・・・・・・・・・・・・・・と・・・・・・・・とれた・・・・・・・・」

「「「「「わああああああああああああああああああ」
「「「「「」

夏目は賞品の浴衣を取れたのだ。会場内では妖たちが歓声をあげる。

夏目が下ろされた後は当然月詠は謝る。仕方なかったとはいえ、思いつきり投げてしまったのだからでも夏目は許してくれた。おかげで浴衣が手に入れられたのだ。

夏目と月詠は大急ぎで燕に渡した。燕は驚いた。

一晩だけと人間になれる浴衣・・・これを着れば自分の姿があの人にも見れる。

「優しいものは好きです。あたたかいものも好きです。だから人が好きです 夏目様、月詠様」

燕は二人を抱きしめ心から感謝した。

「ありがとう ありがとう夏目様、月詠様」

「いってきます夏目様、月詠様」

いってきます

その夜雨が降った。その雨は三日間も降り続け
二葉村はまた水底に沈んだ。

ある日夏目は月詠とニャンコ先生を連れて谷尾崎に話しかけた。

淡い青色の花柄な浴衣の女の子に逢わなかったですかと

すると逢ったよと彼は答えてれた。燕は念願が叶ったのだ

思わず笑顔になってしまう。

「そうだ見てみるかい？」

「え？」

「ちょうど今現像してもらってきたんだ　その時の写真があるんだ」

夏目と月詠は写真を見る

写真には浴衣を着た谷尾崎の隣に青い浴衣を着て人間の姿になった燕がいた。

燕はちよつと照れくさそうだけれしそうな笑顔だった。

夏目と月詠はいつのまにか涙を流していた。

帰る時二人は手をつないで帰った。
燕といっしょに手をつないだ時のように・・・

第10話 五日印（前書き）

夏の旧校舎の肝試し・・・そこに住んでいた時雨様に名を返した。
季節は秋になりつつある時、夏目はまた妖に巻き込まれてしまう。

第10話 五日印

ゾワッ

嫌な邪気がした。．．．しかも、まるでその一部が夏目の家の方角に向かっている。まさか一段と最悪なのに巻き込まれたのかもしれない。

月詠は阿吽に乗って夏目の家に行ってみた。

コンコン

「夏目、居る？」

「あ．．．．．月詠．．．．阿吽．．．」

部屋にいたのは夏目と．．．．．手のひらサイズのニャンコ先生だった。

「どっ．．．どうしたの先生っ！一体何が！？」

吃驚する月詠、夏目は説明する

呪いを受けてしまったと．．．邪気はそのせいだったのだ．．．

とにかくニャンコ先生は今は闘えない。

だから友人帳で三篠を呼び出すことになった。

夏目はニャンコ先生に言われた通りに陣を書き白い布を羽織り、真ん中に鏡を置き、血を垂らした。

ぱん

「我を護りし者よ　我がもとへ来たれ　汝の名、

「三篠」

」

ぱらぱらぱらぱら

どん

後ろに大きな影、三篠がした。彼が久しぶりですなと言った。

夏目のお願いに子分の蛙を助けてくれたから承諾してくれた。

印をつけられたことを説明すると彼は詳しくないから
代わりの者をよこそうと言った。

「では、「ヒノエ」を呼んで参りましょう。」

どろんっ

その言葉にニャンコ先生は吃驚っ知っているようだ。

「おお麗しのレイコ!!」

現れた女性妖怪は夏目をさわさわ撫でながら喜ぶ。
しかし

「おとこーーーーーーーーーー!!?」

ようやく夏目の性別がわかったのか思いつきり離れた。
夏目は当然グツタリしている。

彼女ヒノエはレイコが好きで男嫌いだ

そして小さくなったニャンコ先生を見て大笑いする。

「なんか女好きと男嫌いが無ければお婆さまみたい」

「・・・すごいのか」

「若い頃の父上の修行として小さかった母上を強制的に冥界に送る
ほどだよ」

「・・・・・・・・」

ヒノエは夏目のことを何者だと聞いてくる。

夏目は嘘言わずレイコの孫だと言った。

ニャンコ先生の他界したと言う言葉にヒノエは涙を流した。

妖だけどレイコのために泣いてくれる・・・

夏目はハンカチを差し出す。

「寄るな男め」

「・・・寄りませんから使って下さい

レイコさんのために泣いてくれるのでしょ？」

「あなたが泣けば向こうのレイコさんも少しは落ち込んじゃいますよ。」

ばっ

「「！」」

ヒノエは夏目はハンカチを奪いとると

ちーん

鼻をかんだ

「
・
・
・
・
・
」
」

「・・・・・・・・・・あのねヒノエさん、ハンカチというのは手や汗を拭いたり

涙拭いたりするものなんですよ。鼻ふくのはちり紙で・・・・・・・・」

「おや、そうかい にしてもあんたもいいわねー金の瞳に对照的な白銀の髪っ!!」

頭に生える犬耳っかわいいわー!!」

くいきい

すりすり

「いっいやああああああつ!!」

ヒノエは月詠の犬耳を引っ張ったり、頬擦りしたりした。

夏目とニャンコ先生は気の毒と哀れに思った。

第11話 五日印

ヒノエに頬擦りされてぐったりする月詠。心なしか耳も垂れていた。

ヒノエは夏目が呼んでいると言われ、さらに人間とかわいい女の子（月詠）と話してつい興奮してしまったらしい。

そして彼女はキセルの煙を夏目にふっと吹きかける。夏目はゴホツと

咳き込むと 当然じろ と睨む

するとヒノエは夏目の腕の印を見て言った

「おや これは「五日印」だね」

「いつか印？」

動けない者が扱う呪いで通った者に印をつける。

いろいろあるが五日間かけて生気を吸ったり、印主へ引きよせて食べたり、

こうして力を蓄えいつか自由になる力を得るのだ。

夏目は妖が居た所を案内したが居なかった。

ヒノエが言うには蛙を追いかける内に

人に通れない道入ってしまったから会ったんだと言っていた。

とにかくヒノエは調べることになり、夏目とニャンコ先生は家に帰ることにした。

月詠と阿咩は心配だから夏目たちを送って行く。

「腕痛む？」心配そうに聞く月詠

「うん・・・」

すると少し前に人形の影がぽつんと立っていた。

夏目たちは横を通り過ぎる。影は動かなかった。

「・・・・・・・・何だったんだろう？」

「・・・・・・・・さ・・・・・・・・さあ・・・・？」

翌朝、月詠はあの影のこともあったので夏目に会いに行った。

夏目は登校途中だった。あれからどうだったか聞いてみると例の影が門にいたそうだ。家に近づくなんてメリーさんみたいだ
メリーさんの解らないニャンコ先生と月詠に有名な怪談を教える。

「電話がかかってくるんだ『私、メリーさん。今、門の前にいるの』って。

暫くするとまた電話が鳴る。出てみると『私、メリーさん。今、玄関の前にいるの』」

その次は、

『私、メリーさん。』『今、玄関の中にいるの』

「・・・・・・・・」

家に帰ったら影は玄関の前にいた。メリーさんのように

するとヒノエが現れた。印主の正体がわかったようだ。

強力な邪鬼で長年かけて印を使い、後一人食べれば封印が解けるらしい。

そしてその一人が夏目だ。そいつは待ちきれず影を飛ばしたらしい。

影に重なったらアウト そう心に刻んでたその時だった。

どろんっ

ニャンコ先生が招き猫姿のままでかくなっただの。

のろいの余波で妖力が安定しないらしい

それから夏目は残り四日逃げ切ることを誓う

とりあえず帰宅はするけど一カ所はあぶないので夜中はこっそり抜け出して野宿

そして朝帰宅して登校なのだが・・・

「いってきま・・・」

影メリーさんがとうとう玄関に入り込んでいた。

ぞっ

「いっいっってきます」

そして明日から三連休のため友達の家泊まると塔子さんに連絡し山に行った。

夏目はヒノエがかしてくれた巻物で式の呼び出しの練習する。

呼び出しは大分様になってきたのだが五日印はもう大分広がっており苦しそうだ。

ヒノエは魚をとり月詠は水を汲みにその場を離れる

でもそれがいけなかった。あの影が来てしまったのだ。

夏目はなんとか避けるが痛みで思うように動けない。

こうしている間にも影が近づいてくる。

「夏目使え」

ヒノエは巻物を投げた

受け取った夏目はしゅると巻物を開く。自分の髪の毛を何本か抜き

「日、通りし道より来れ 陰、祓う者。」

呪文を唱えながらふっ息をふきかけると

巻物の文字が浮き上がる。そして

どろん

「来たか・・・」

でも式は小鳥だった。かわいかった。やっぱり呪いのせいで体力が落ちているせいだろう。

影は式から喰ってやるといってきた。夏目は慌てて庇う

「「夏・・・」」

「チュン」

式が鳴いたそのときだった。

カツ

光ったのだ。その眩しすぎる光より、

「ぎっ・・・」

影は消えて行った・・・。

ニャンコ先生は元に戻り夏目の印も消えている。

その後軽くヒノエに怒られたが・・・

すると三篠が現れた。これは三篠が試したことだったのだ。そして判定は相応しくない。しかし気に入った。面白そうだししばらくは名を預けようと言ってくれた。

ようやく夏目は家に帰れた。

しかし彼に待っていたのは塔子さんのお説教。

連絡先を教えなかったからだ。

怒った塔子さんに夏目は吃驚、

彼は塔子さんの説教を受ける羽目になる

でも自分のために説教してくれる人がある

ほっとしたのか夏目はバタツと倒れてしまった

それから夏目は風邪を引いてしまった

翌日、月詠と阿吽は夏目の様子を見に行くとなんか騒がしかった。

「つぶれ大福は黙っておれ」ドスン

ボタン

「わかめ頭め　むしってくれる」

「うう・・・寝かせてくれ」

ポイ　ポイ

「「!」!」

暴れていたのはニャンコ先生とヒノエだった。あまりの煩さに寝込んでいた

夏目に追い出されてしまった。

「ニャンコ先生、ヒノエさん夏目は寝込んでいるから静かにしないと・・・」

「まあまあ月詠っ実は美味しい団子があるんだ。一緒にどうだい」

「あっありがとう」

「何いつヒノエおれにもくれっ!!」

「やだね」

「んだとー」

ヒノエは月詠に抱きつきながら誘う、ニャンコ先生も催促するが却下された。

でもその後月詠の願いにより

串にささっていないお団子一粒を貰えそうだ

ヒノエは呆れ

ニャンコ先生はかなり不満げ

月詠は苦笑いだっという。

「食べられただけいいじゃないか」

「よくなーなーいっ!」

「あはははは・・・」

第12話 見える人

月詠は今日は気分を変えて町中に行ってみた。
するとニャンコ先生一人だけぽてぽて歩いていた。

「ニャンコ先生一人なの？」

「いや、夏目の気配があのお店からする。しかも変わった気配もするな。」

月詠はスンスンと臭いをかいでみると覚えのある匂いと知らない匂いがした。

近くに妖怪の臭いもする。

「……………本当だ。」

一緒に店に入ると夏目が髪を操る妖に腕と首を縛られていた。苦しそうだ。

眼鏡の男はおそらく、そいつの主だ。なのにそいつは

「こらこら勝手をするな 私の大切な友人だ。

失礼は許さないぞ」

その時だった。

「失礼はおまえだ。」

夏目は目を見開く。そこにいたのはニャンコ先生と月詠だったのだ

から。

「私の獲物に気安く声をかけるなガキが」

「私の友達傷つけるなら容赦しないわよ」

カッ

ザシユッ

「ぎゃ」「!!」

ニャンコ先生は光り、月詠は自らの爪で奴の髪を斬る。

男・名取は眩しい光に驚いたが、むしろ驚いたのは

「そ・・・その女の子と珍妙な生き物は・・・?」

ふたりのことを聞こうとした時、店員さんにバレた。

夏目は慌ててコートと月詠とニャンコ先生を掴み逃げるように走る。

「す、すみませんじゃあおれはこれでっ」

「あっ・・・待・・・」

明日、明日また七辻公園で待っている」

翌日夏目達は気になって七辻公園に行くことになった。
途中一つ目鬼のお面をつけた女の子の妖と会った

「やあ」夏目は思わず挨拶したがこっちを向いてくれた。

七辻公園に到着すると夏目達は無言になる。

名取はキラメキオーラが出ていて近づきたくないのだ。

周りの女性達は頬を赤らめているが……

「あつ夏目————こっちこっち————」

「「「!?!?」」」

そしてニャンコ先生を見て笑う。猫と言われても饅頭みたいに丸々としていて
おもしろいからだ。でも夏目は思う。名取にはきつとバレているだろう。

素直に猫じゃないと言ったらそっかありがとうと言った。

「君は何者かな？人間の気配も感じられるし……
なのに妖の気配も感じられる。」

「……私は月詠。父は犬妖怪，母は人間の半妖よ」

「ありがとう。そっか かわいい子分さんだね」

そう言って二人の頭を撫でる。すると

「子分じゃなくて師匠だ青二才!!」 「耳に触れるなバカあ!!」

ゴッ バキッ

「!?!?」

どろん

「おのれ主さまに何をするブタ猫と犬耳娘め」

「何だとこのチリチリパーマ」

こうして喧嘩勃発泊まったのはそれから数分後……

止める決めては夏目の拳だった。

実は名取は倉の妖を祓うのを手伝って欲しいと言って来たのだ。

「妖らはいつも理不尽で迷わくな存在だな」

「……そうですかね事情がわからないと何とも……」

「たしかに悪い奴も居るけど、良い奴も居るんですよ？」

実際に大妖怪であるお爺さまと父上は人間を愛して半妖の子作りしました。

戦国時代の妖怪退治屋は猫又も連れていたそうです。」

「えっ……そうなの？」

「意外だな」

「だからちゃんと見極めてください。」

帰り道また一つ目鬼の女の子に会った。

そして怒られる。夏目がわからないまま彼女の首の縄をひっぱったからだ。

夏目はゆるんでしまった彼女の包帯を巻き直す。

すると彼女は昔話を始めた。

山守りしていたが捕まり、この家と倉を守れと言われた。

倉を開けられたらそいつを崇れと・・・

そして最近開けた者がいたので崇っていたのだ。

役目を果たさないと縄がしまり首が切れてしまう。

昔は逃げようとしていた。でも無理だった。

手に怪我しながら座っていた時だった。

人の子が心配そうに話しかけて来た。

男の子は優しく包帯を巻いてくれた。

時が経ちあの子が祓い人として帰って来た。

「異形とは面倒だね　こんな布きれ一枚の礼もろくに出来ない。」

その声は凄く寂しそうだった。

次の日　名取は旧家の庭に陣を書いていた。

そして夏目達に気づく。夏目は聞いてみた。

今日祓う妖のことを・・・その妖はまさしく昨日の妖ことだった。
夏目と月詠は彼女が来る前にやめさせないと　そう思い走ったが

名取の式・瓜姫の髪で木に縛られる

こうしている間にも来てしまった。

「放してくれ・・・名取さんだめだ」

「行っちゃだめっ」

しかし彼女は陣に入ってしまった。

ピシッ　ピシッと鳴り始める

彼女が危ない

夏目と月詠は強引に瓜姫の拘束を解く

そして陣に走った。

バチバチ

「っ・・・」 「う・・・」

「何を早く出なさい　私には雷を止められない・・・」

バチバチバチ

「う・・・」

「ちっ」

舌打ちして三人を抱えたこんだのは変化したニャンコ先生だった。

「先・・・」

ドンッ

横を見る。そこにはニャンコ先生と焦げ付いたお面の女の子がいた。

「生きているよ」

首の呪縛も焼き切れた

彼が言うには呪縛から逃れないならせめて一思いに逝かせてやりたかった。うまくいけば一命とりとめて縄焼いて自由にさせてやりたかったらしい。

そして名取はようやく思い出してくれた。

幼い自分を慰めてくれた妖だったということ

夏目達に感謝した。おかげで軽い怪我ですんだのだから。

名取は謝る。こんな巻き込み方しなくなかった。

夏目を見ると昔の自分を思い出して

何かを伝えてやれるんじゃないかと・・・

「それより月詠ちゃん大丈夫？
名取の問いに

「・・・うん・・・なんとか・・・」

そう言いながら起き上がる。

「
「
「
「!
?
「
「
「
「
「
・
・
・
・
・
どうしたの?
」

「……………つ……………月詠……………髪っ！！髪が真っ黒」

「犬耳も無いぞっ!？」

「人間だね……どう見ても」

「いったい何が……」

四人の驚く声に月詠は呑気に答える。

「私は半分妖怪、半分人間の半妖でしょ？ 実は半妖は月に一度人間になる日があるの。私の場合は新月ね。でもほかに人間になる場合があるわ。それは聖域とかに入った時、極端に妖力が落ちた時よ」

すると名取は納得したように

「なるほど……今回は妖祓いの雷を落とした。……」

「そのせいで人間になったんだね？」

「そういうこと」

「大丈夫だよね？」

「もう少ししたら戻るよ。」

しばらくして月詠の姿は元に戻ったという。

第13話 アサギの琴

月詠が阿吽と散歩しているときだった。

「あつ月詠・・・」

話しかけたのは田沼だった。彼ははっきりと妖見れない。

でも人間の血が流れている月詠だと薄く見れるのだ。

そして彼は下校途中、月詠に話しかけて来た。

「どうしたの田沼？めずらしいね」

「じ・・・実は夏目が・・・一瞬女に見えたんだ」

深刻そうに言う田沼

「・・・・・・・・・・そりゃあ・・・・夏目は女顔で見た目綺麗だよ？」

周りの妖達もお婆さまに良く似ているっていうけど・・・・でもさすがにねえ・・・」

「いやっそう言う意味じゃない！！話しかけたら青い長髪の女に見えたんだ

その後いつもの夏目の姿だったが・・・・」

「・・・・・・・・そうか何かに憑かれているね。田沼は力は少しあるからなんとなく見れたんだよ。後で夏目に会いに行ってみるね。」

「頼む」

田沼と分かれて阿吽に乗って夏目を探す。

しばらくして彼の匂いを感じとった。

匂いの方向にいくと夏目は呆れながら池にいた。

近くには包帯ぐるぐる巻きの妖がいた。

「おれはやるぜえええ!？」

「・・・・・・・・何やってるの」

「あっ月詠」「だれだお前!？」

「私は月詠 半妖よ。にしても夏目いったい何があったのよ？
田沼から女に見えたっていうし、今池で何か穫ろうとするし。」

「・・・・・・・・い・・いや・・じ・・実は・・」

夏目は事情を説明する

昨日この包帯ぐるぐる巻き妖怪メリーさん（夏目命名）は
病気により弾けなくなった蒼琴弾きアサギのために器探しにきた。
そして妖を見れる夏目が寝ているスキに

アサギを取り憑かせたのだ。彼女は罪悪感いっぱい

体から出て行く方法は一つ、彼女の希望である蒼琴を奏でることだ
しかし蒼琴はないので楽器作りから始めるため

材料の「線引き」という鯉そっくりの妖怪をとり池にきたのだ。

「・・・・・・・・なるほど・・だったら私も手伝うよ。」

「「おおっ」」

こうして三人の線引き探しが始まった。

「「「おりゃああ」」ざばああん

「「「おりゃあああああ」」ざばばばあん

夏目達は探した。でも人間である夏目は数十分でダウンした。

「どこだーーーーーっ」

「知らなーーーーーっ」

そう言って月詠は光の鞭で池から魚を弾き出す。
でも見つからない。

ばしゃ　　ばしゃ

「あっ見ろ夏目　月詠居たああ　かかれえーーーーっ」
「「!」」

「こんにゃろーーーーっ」

バsshヤ　　バsshヤ

パシヤ

きよとんとするメリーさん

『ふふ』

夏目の後ろにはアサギが楽しそうに水をかけたのが見えた。

「・・・アサギか！！遊んでいる場合かああああ！！」

「きゃーーーーっつ」

そしてようやく

「・・・と　とったぞ～～～！！」

ようやく穫れたのだ。口についている釣り糸、これは「良甲」という仙人の物で

これを釣ろうとしているがいつも糸を切られて逃げられてしまうのだ。

この糸を弦に使うらしい。

次は胴

「地表に頭を出す際の竹の子に貫かれている切り株」だ

でも夏目は倒れた疲れが溜まったのだろう。

メリーさんは背中に背負って夏目を送っていく。

「・・・もう少し　もう少しで弾かせてやれる。」

第14話 アサギの琴

夏目が目を覚ました。

メリーさんは夏目と月詠にアサギが蒼琴を弾けなくなった理由を言った。

彼女の右手の指がもう三本しかないのだ。

土のように崩れていく奇病。ちがう器に入れば進行は遅くなるそう
だ。

でもメリーさんは感謝した。だってアサギが久しぶりに笑ってくれた。

最後に笑っていたのは憧れてやまない壬生様で弾いてた時……

そしてその演奏中に肌が崩れ始めた。

翌日森で竹のはえた切り株を三方向に分かれて探す。

がさがさ

「無いね……阿吽」

月詠の言葉にこくりと頷く阿吽。

いろんな所を探していると

「でかしたぞ夏目!!」

「わーーーーっ」

夏目が竹のはえた切り株を見つけたゆえ大喜びし、
夏目を胴上げをするメリーさん。胴上げされる夏目は吃驚する

「なにに。見つかったの？」

「ああっそうだっ!! さっそく削り出すぞー」

メリーさんは嬉しそうに切り株に手をかけるが

「ふんぬううううう」

根を張っているせいか固かった。

「……貸して、こういう場合は地面を掘って
少しは緩くするものなの」

「な……なるほど……」

「掘るなら任せなさい」目がキラッ光ったと思ったら瞬間

ババババババババババババババババ

「うおおお!？」

なんと素手で掘り始めた。叔父、犬夜叉直伝の穴掘りだ。

そして切り株の根元はぐらぐらになった。

メリーさんと月詠は力をいれて抜き始めた。

「ふぬあああああ」 「ううーーーーん」

ずぼおつとようやく抜けた。

「よっしやあああ 後は削り出した！！月詠！ありがとな！ゆつくり休んでくれ！！」

「うん。わかった・・・」

さすがに疲れたのか月詠は阿吽と夏目の隣に寝っ転がった。

しばらくして楽器が完成した。

皆は大急ぎで走った。しかしその時運悪く妖が襲って来た。

メリーさんことアカガネが夏目を庇う。

「この！！」「てや！！」「ビュッ」「ぎゃっ」

アカガネと月詠のおかげで倒されたが蒼琴が落ちて行く。

夏目は手を伸ばした。

「夏目・・・」

目を開けると心配そうに見つめる二人の姿。

「大丈夫か？」

「……ああ……楽器は？」

「無事だ お前が守ってくれた」

「しっかり抱えていたんだよ」

アカガネは磯月の森の道にいけるかと聞いてくる

すると夏目……いやアサギ微笑んだ

もしもう一度弾くことが叶うなら

優しくて 大切な 友人のため

アカガネのために弾きたいと言ったのだ

「アカガネ、そして楽器作りを手伝ってくれた月詠さん 聴いてくれますか？」

アサギは夏目の体を借りて音楽を奏でる。

とても暖かくて、やさしくて、美しい音を

こうして彼女は夏目からはがれていった。

アカガネは瓢箪で寝ているアサギを連れて里に帰るそうだ。

ボロン・・・

夏目は残された蒼琴を弾くが美しい音は出なかった。

夏目と月詠は思う、あの美しい音は彼女の心が奏でたのだろう。

「あっそうだ月詠も蒼琴弾いてみる？」

「えっいいの？」

「やめとけやめとけ夏目 弦が切れるぞ」

ニャンコ先生は馬鹿にするが

♪ポロン？ポロロロン？ポロロロン？

アサギ程ではないが中々上手かった。

「何いっ！？」「うわっ上手いな」

「何でだぁあっ何で上手い！？」

ニャンコ先生が詰め寄ると月詠はさらりと答える

「お婆さまが大妖怪の娘なら学問、剣術、女性のたしなみも出来て当たり前だからっていろんな先生に教え込まれたのよ。あ・・・でも剣術を中心にした戦い方は父上にだけ教わった。毒華爪も光の鞭も父上の技だし・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・ ・ ・ ・ ・ やっぱり大妖怪の娘だからだろうか

最後以外はお嬢様と言ってもおかしくない内容だった。

ちなみに蒼琴はアサギの次に上手い月詠が貰うことになったそうだ。

第15話 黒ニャンコ

夜・・・月詠と阿吽が寝ているときだった。

がさがさ

「ん・・・」

繁みに何かが居る。そう思った瞬間

がさっ

現れたのは友人帳を銜えた黒いニャンコ先生だった。

「えっ！？ニャンコ先生？どうしたの！？」

慌てて聞いてみる月詠。しかしニャンコ先生は友人帳を銜えたままどこかへ行った。

その後だった

がさっ

「あっ月詠」

「夏目・・・・・・・・えっ何でニャンコ先生がここに？さっき黒いニャンコ先生が友人帳銜えて向こうへ行っただよ？」

驚いたように説明する月詠

「やっぱりここを通ったか・・・ん、何だろう　あの光上のほうの山道に」

「「ん？」」

光りは点々と並んで移動していた。狐火だ。

どこに行くんだと思ったら妖たちが人間の匂いがすると言いだめた。

ニャンコ先生は慌てて変化すると夏目を倒す。

ニャンコ先生のケモノ臭のおかげでやりすごせた。

妖たちはむかし主様が人の匂いつけて帰って来たやら

人に化けて遊び美味しいお土産を分けてくれたやら

でも・・・妖たちは人間と関わるとろくなこと無いと言いつて行った。

その時だった。

「おや　そのお姿は斑さまではありませんか・・・お久しゅう」

右目に大きい蝶を止まらせた女妖怪が現れた。

「お、お前は・・・紅峰か」

「先生の知り合いか」

「まあな」

「意外と知り合い多いよね」

そして紅峰は夏目をエサと勘違いしたのかおこぼれを　と顔をみた瞬間だった。

「ぎゃっ夏目レイコ!？」

「阿呆声がでかい!!」　だしっ「ぎゃ」

とりあえず夏目はレイコの孫だと説明する。

次にニャンコ先生は黒いラブリーな猫を見なかったかと聞く
月詠は思う・・・招き猫のような黒猫じゃなくて?と

すると紅峰は先ほどの列はこれから始まる飲み会でその途中

頭のデカイぶさいく黒猫が会場に向かうのを見たと言った

夏目と月詠は紅峰を説得して連れて行ってくれることになった。

「頑張ろうな先生、月詠。」

「ええ」

ぼんっ

「お前らはまた勝手なっっ」

招き猫姿になったニャンコ先生を見て紅峰は

「ぎ

ぎゃああああー！ー！ー！？ちんちくりんにー！ー！ー！っ」

当然のごとく悲鳴を上げた。

「うううう・・・おいたわしい・・・」

「招き猫を依代に封印されていたらしいんです・・・

それで夏目がちよっとした拍子に結界の縄を切っちゃったんだけど・
・・

体が依代と馴染んだらしくって」

そう言いながら月詠は阿吽の手綱を引いて連れてくる。

とてとて

「こっちか酒はー！ー」

「酒飲みにくんじゃないぞ」

そんな皆の姿を影から見ていた黒ニャンコがいた。

第16話 黒ニャンコ

夏目は目と書かれたお面、ニャンコ先生は人間の娘に化けて自分の顔が描かれた面をつけた。月詠はと言うと

「よしできた。」両頬に紫色の二本線の入れ墨の様な化粧を施した。

「変わった化粧だね。月詠」

夏目の言葉に月詠は笑いながら説明する。

「犬妖怪一族は基本的に入れ墨みたいな模様があるんだよ。

お爺さまは両頬に一本ずつみたいだし、お婆さまも両頬に一本ずつそして額に三日月模様。

父上は両頬に二本にお婆さまと同じ三日月模様だよ。」

「あゝだからか」

家族の模様のように化粧を施したのかと妙に納得する夏目だった。

こうして夏目達は会場に到着した。

そこには閻魔様みたいな容姿の妖が他の妖たちに酒を振る舞っている。

紅峰はどこにいったんだと聞かれていたが化粧ですよ。とさらりと答える

妖は夏目たちを見て見かけない奴らだなという。

紅峰は普通に連れなんですよと夏目達を紹介する

「ねーちゃん犬妖怪？かわいいねえ」

「この騎竜もなかなかカッコイイなあ」

「ふふ・ありがとうございます。まあまあ一杯どうぞお酌しますよ。」

「おっいいねえ」

月詠は杯に酒を注いだ後、本来の目的である黒ニャンコを見なかったか聞いてみた。

「すみませんが どなたか招き猫のような黒猫見ませんでした？
友達の大切な物を盗られてしまって・・・」

「おおっ見たぞ」

「俺も」「ワシもじゃ」

「そうですか・・・」

その時 閻魔さま（仮）が主様を救うため夜襲をかける言い出した。

夏目なら止めようとするだろう思った時だった

「いたっ！！あっ！待てこら」

夏目が黒ニャンコを見つけたのだ。

月詠と阿咩も後を追いかける

しばらくして黒ニャンコはあっさりと捕まった。

夏目と月詠は考える。わざとここに誘導したのではないのかと・・・

ニャンコ先生は紅峰に探れと命令する。

力がある妖だけどニャンコ先生と同じように招き猫に封じられ、封印の影響で知能低下が起きているらしい。

「・・・ん？この気配、覚えが・・・はっ

ぎゃっこの妖気　もしか主様！？」

「何！？」「うそ！！」

驚くのも無理も無いだって招き猫に封印されているのだから

「お、おいたわしい・・・おのれ人間共め」

「ベ・・・紅峰さん、抑えてっ抑えて」

でも招き猫の姿だと気づいてくれない。

紅峰が言うにはレイコに名を奪われたそうだ。

でも招き猫の姿だと名前がわからない

すると妖たちが来てしまった。

夏目は慌てて主様は帰って来ている。

だから主様の名前を教えて欲しいと言ったが
どんどん襲われそうになる

ニャンコ先生は助けようとするが弾かれる

そのときだった。

人の子だとざわつく中たしかに聞こえた

『
様がいれば』

ばん

「「リオウ」 君へ返そう 受けてくれ」

名前はしゅるしゅると主様に入って行く

ドン

招き猫が碎ける。現れた姿を見て妖たちは驚いた。

「・・・主様」

「主様・・・」

「リオウ様・・・」

翼の生えた妖はまさに主様と言ってもおかしくなかった。
彼は夏目と月詠に感謝する

そして彼はみんなに阿呆だと言われた意味が解った気がするといった。

でも月詠は言っただけだ。

「祖父も人間を愛して半妖の子を作りました。父は最初は人間嫌いでしたけど

いつの間にか人間の母を愛して半妖の私が生まれました。
だから主様あなたは阿呆じゃありません」

その言葉にリオウは驚くが・・・くすりと笑ってくれた。

「さらば、人の子。半妖の子　さらば」

こうしてニセニャンコ事件は幕を閉じた。

「ところで月詠・・・」

「なに？」

「君のお父さんってどんな妖怪？」

夏目は人を愛した月詠の父に興味を持った

「んー顔は美人だけど無口無表情、でもわたしにはふって微笑むけど

手下にとってそれがすごく恐ろしくて

初めて見た時百年寿命縮んだって言っていた。

怒ったら目を真っ赤にして本来の姿である妖犬に変化するよ。

まああの人落ち着いている方だからめったに変化しないけど・・・

・

どうしたの？」

「・・・・・・・・・・い・・いや」

夏目は確信した。

月詠はお母さん似だということを

第17話 ホタル

数日前妖騒動でようやく蛍が飛んだ。

月詠は幼い頃を思い出す。

父と母に連れられて蛍を見たことを・・・

あまりの幻想的な風景に思わず手を伸ばしてしまった。

父と母から微笑ましそうに笑われた。

でも悪い気はしなかった。

とても楽しかったのを覚えている。

今度 父と祖母に文を送ろう。

父は昔のことを思い出してくれるかな

思い出してくれたら私はすごく嬉しい・・・

お婆さま 父上 邪見、お元気ですか 私 月詠は元気です。

この土地の妖怪はかなり親しげですが修行はがんばってやっています

す。

私に夏目という人間の男の子と妖からは斑と呼ばれる妖、ニャンコ先生と

仲良くなりました。

夏目はかなりの力を持っている故いろんな妖が寄ってきます。

そのせいで色んな騒動が起こります。

そんなある日 蛍の妖と出会いました。彼女の友人は夏目と同じように

見える人でしたが、大人になってしまったので見えなくなったそうです。

彼が祝言を上げるまでそばにいることになったのですが

虫の姿でも良いから会いたいと行ってしまいました。

でもそこには蛍を食べる妖がいたのです。私たちは大慌てで追いかけて

その妖をぶん殴りました。でも違う蛍でした。

私は友人の男性の所に行くことと許嫁と歩いていました。

すると蛍が一匹、彼の手に止りました。少し歩くと

幼い頃に見たような たくさんの蛍が現れました。

とても奇麗でした。父上、覚えていますか

愛する孫であり、娘から届いた文を見た祖母と父・殺生丸はというと

「そういえば蛍を見に行っていたの・・・どうだったか？」

「・・・・・・・・幼かったゆえどのように光るのか理解していなかった・

・・。
」

どたどたどた

「月詠様から文が届きになったのですか!？」

あの方がご病気になられたのですか!?! 殺生丸さまっ!?!」

うるさい家来に殺生丸は辛辣に

ゲシッ

「ぎゃっ」

蹴った

第18話 呪術師会合

ひらっ

「?」

ひら・・・ひらり ひら

「何かな これ」

そういいながら月詠は、ぱしっと掴む。それはこんにちはと書かれた紙人形

「・・・何これ？」

ぽおっ

「きやあっ」

いきなり紙人形は燃えた。月詠の妖力が強いからだろう。

そして彼女は焦げてしまったがこれについてる匂いで

飛ばした人物の所に行くことにした。

阿吽に乗ってしばらく行くとそこには帽子眼鏡の男性に文句を言う夏目が居た。

「夏目っ名取さんっ」

「やあ、月詠ちゃん。」

「あっ月詠、阿吽！まさか月詠の所にも？」

「うん・・・見ての通り焦げた。」

そういいながら焦げた紙人形を見せた

こうして一行は夏目の家に行くことになった。

途中、名取が帽子眼鏡を取ってしまったので

周りの女性から黄色い悲鳴を上げられたが・・・

しかし家に着いた時目を見開く。扉の前が血で染まっていたのだ。

夏目は慌てて入った。玄関も血まみれ・・・まさか・・・

でも塔子さんは怪我なんてしていなかった。しかも血なんて気づいていない。

妖の血だったのだ。

血は夏目の部屋に続いていた。

名取はニャンコ先生にくどくどと説教する。

「ニャンコじゃないと言っとなるだろうが」

血は押し入れに続いていた。

開くと顔だけの妖、そいつは逃げて行った。

そこに残っていたのは先ほどの妖のせいで片羽を失った妖鳥だった。

「うわーーーーー」

「きゃーーーーー」

夏目は急いで布団を引き、名取と月詠は彼を手当する。

名取は夏目達に化け物退治しないかと誘う。

興味あるのだったら呪術師の会合、明日の夕方ここにおいでと言われた。

その日の夜月詠は父に文を書いた。癒しの刀、天生牙を持つ父に

『父上お元気ですか。月詠は元気です。今日、夏目の家に言ったら玄関が妖の血で血まみれでした。』

彼の押し入れに馬鹿でかい顔の妖がいたのです。

そいつは驚いたのか逃げて行きました。

そいつは押し入れで何かを食べていました。

妖鳥です。急いで手当をしましたでしたが片羽を失い、瀕死の重傷です。

父上、この私一生のおねがいです。その子を助けて下さい。月

詠より』

「あのー殺生丸様・・・」

「何だ？」

「・・・い・・・行かれるので？」

「他の妖に使う気は無いが 娘のためだ・・・行くぞ・・・」

「はっはい」

「殺生丸よ・・・どこかにいくのか？」

「・・・月詠の所だ」

「何ならこれを持って行け、月詠の好物の菓子じゃ。

それとたまには里帰りして祖母と茶を飲もうと伝えてくれ」
「そういいながら包みを渡す。

「承知した。」

第19話 呪術師会合

月詠は阿吽を連れてある場所に着く。すると

「ようこそ おいでだ お客人 入口はこちら」

そこには北口と書かれた傘を持った小さな妖だった。

「ねえ ここに招き猫を連れた人間通った？」

「はい通りました」

どうやら夏目たちも着いた様だ。月詠は彼らの匂いをたどって進む。

そして着いたのは大きな屋敷みたいな建物、その玄関には夏目とニャンコ先生

名取 そして彼の式である柊だ。

「それじゃ合流したし、中に入ろうか」

「はい」

名取に連れられて皆は建物に入った。

入るとそこにはたくさんの人と妖がいた。

あまりの数に夏目と月詠は驚く

「こんなに・・・？これ皆本当に・・・？」

「すごい」

中にはおそらく田沼のお父さんの噂話をしている者もいた。
その時 あれはレイコじゃないか そう聞こえた。

夏目は妖と人が多いせいか妖の声か人の声かわからなかった。

名取はお面を勧めてくれた。

名取の体中を動くヤモリの痣の話をしている最中だった。

「名取

新しい式をつけたっていうから見に来たよ」

現れたのは小さな丸眼鏡をかけた初老の女性だった

七瀬という女性は的場という有名な妖祓い人の秘書だそうだ。

名取は夏目たちを紹介する。すると彼女は驚いたように

夏目の顔を隠す面をめくり

「夏目レイコを知っているかい？」そう聞いて来た

レイコは祖母だと聞いた時、孫かと納得する

彼女はくわしく知らないが妖の中ではレイコは本当に有名だと説明

した。

亡くなったと聞いて「妖にでも？」と聞いてくる
聞ける立場じゃなかったと答えると

「だがもうひとりで戦うことはないよ」
そうやさしく言ってくれた。

そして七瀬は名取に例の妖のことを聞いて来た

名取は退治は無理でも封印くらいなら出来ると言った。

その様子に彼女は餞別かわりの魔封じの壺を渡した。

彼女が去って行った後

廊下の掲示板に貼ってある例の妖の絵

夏目と月詠は聞いてみた

「おれを探す時に飛ばした紙人形で あの花を探せませんか」
「できるのならお願いします」

名取は名を知らないから無理といったが
少し考えて

「この会場には気が満ちているし君たち程の力があれば
ひよっとしたら飛ばせるかもな」

「「お願いします」」

控え室で名取は水で陣を書く

夏目たちに陣の上に手を出させ、その上に一枚の紙人形を置いた。

「目を閉じたら相手の姿を頭に描く 探すよう命じながらね」

夏目と月詠は目を閉じ、あの妖を描く

そして

カサリ・・・と浮いた瞬間

「・・・行け。」

ビュン

ぱりんっ

「きゃーーーーーっ!?!」

「わーーーーーっっガラスを!?!」

「ごめんごめん窓あけ忘れた」

「「えっ」」

とりあえず成功だが建物の中に入ったのだ。

つまりあいっはここにいる。

夏目たちは急いで紙人形を追いかける

柊が先に行った。

しばらくしてある部屋に着いた。

そこでは酒盛りの最中だった。

月詠は聞こえていた。カサカサと鳴る紙の音……そして広がる
血の臭い

上からポタ・・ポタ・・と血が落ちる

「上っ」

「みんなさがって・・・」
どおん

天井から柵の太刀が刺さった妖が現れた。

そしてその場にいる者を守るため前に出る。

その時左腕を噛まれたが

「こ・・・この」「くらえっ」

夏目の拳と月詠の爪で逃げて行った。

夏目と月詠が先生と叫ぶと舌打ちしながらも変化して追って行った。

夏目たちを驚く周りの者たち、しかし夏目たちは周りの皆の静止を
振り切り

すぐニャンコ先生の後を追いかける。

「夏目っ名取さん阿吽に乗って。その方が速い」
「わっわかった」「うん」

そして阿吽に乗ると

「夏目、手綱はしっかりとにぎって。名取さんは夏目にしがみつい

て下さい」

「う・・うん」「妖に乗るのは初めてだなー」

月詠は自慢の瞬発力で一気に行く。その後を夏目たちを乗せた阿吽が飛んだ

外に出た後三人は急いで封印の陣を書き上げる。

陣の中心に七瀬からもらった魔封じの壺をおいて準備終了

そしてニャンコ先生が奴を追いつめる

「よしやるぞ」

ぱんっ

「出よ、我はその手を求む」

どん どん

「掴め 闇を守りし者よ。」

すると壺からたくさんの黒い手が現れ、妖にからみつく

そして妖は勢い良く壺に吸い込まれた。

「ふっ蓋!」「はっはい」「えいっ」

三人掛かりで蓋をし、ようやく封印ができた。

でも奪われた。魔封じの壺をくれた七瀬に

しかも彼女はいらなくなったカラスを餌にして捕まえようとしていたのだ

つまり夏目の家に逃げ込んだ妖鳥は式だったのだ。

夏目は当然怒る

しかし彼女は退治されて当然の化け物を人のために使ってやろうと言う

こうして彼女は去った

ニャンコ先生は夏目がかけた封印が易く解けるものかと言ってくれた

柊はふっとばされただけで無事だった。

夏目と月詠はもっと強くなりたいと願った。

第20話 呪術師会合 後日談

夏目と月詠は今日も的場一門と妖のせいで重傷を負った妖鳥の看護をしていた。するとその時であった。

「ん？」

「あっ」

ニャンコ先生と月詠は何かを感じとった。

「来たっ来てくれた!!」

月詠は嬉しそうに外に出るがニャンコ先生は

「何だこの妖気は!?!尋常じゃないぞ」と叫ぶ

「とにかく月詠を追いかけようっ」

夏目達は急いで外に出る。するとそこにいたのは

翁と女の顔の杖を持った小妖怪を従えた紅い模様が入った白い着物と白い袴、

黒い鎧を纏い右肩に白い毛皮を羽織り、月詠と同じ白銀の長髪に金の瞳、

そして額に三日月模様の男性が立っていた。

月詠は嬉しそうな笑顔で叫ぶ

「父上、久しぶりですっ!!」

「……うむ」

「……祖母からの土産だ……」

父上と呼ばれた男性はお土産の包みを差し出す。

「わあーありがとうございます。邪見も久しぶりねっ」

「はいっお久しゅうございます。」

そしてその光景を見た夏目たちはというと

「ちっ父上ええ！？月詠のお父さん！？」

「似てんっ全然似てないぞ！！」

それを聞いた邪見は当然怒る

「これっ小僧！！誇り高き大妖怪、殺生丸様を庶民的にお父さんなんてっ

しかも娘である月詠様を呼び捨てに・・・」

「いーの邪見」

「えっしかし」

「私の友達よ、呼び捨て結構！大歓迎よ！」

「あーも性格も容姿もりんに似おってーっ」

「誰だそれ」

「とにかくっ父上、文に書いた通り今瀕死の妖がいるのです！
あなたのお力を貸して下さいっ」

「えっ月詠 一体どういうこと？」

「後で説明するけど父上は一回だけ死んでしまった命さえも
生き返らせるほどの力があるの。それさえあれば・・・」
ニャンコ先生は驚いたように

「まさか治るのか・・・」

「ほっ本当なの月詠!？」

夏目の問いに月詠は

「奪われた片羽があればもっと良かったんだけどね。」

夏目は急いで殺生丸に頭を下げる

「俺からもお願いします!あの妖鳥を助けて下さい!!」

夏目の必死さが伝わったのか、はたまた娘の友人だからか

殺生丸は言った。

「小僧・・・そいつはどこだ・・・」

その言葉に夏目と月詠はパアッと笑顔になる。あの子が治るのだから

「こっちですっ!!」

そして部屋に案内するが邪見が言ってしまった。

「なんだなんだ小部屋ではないかっ!!」

「こべっ・・・」

「こんな狭い部屋に通すなん」げしっ「てっ」

「城と一般家庭の部屋を見比べないっ」「・・・はい」

ぎりぎりぎりど邪見を踏んでお仕置きする月詠

「あーもー怒った所は殺生丸様に似て……」
さめざめと泣く邪見

しかし殺生丸・月詠親子は無視だった。

「父上お願いします。」

「……うむ」

すると彼は腰の刀を抜いたのだ。

そのことに夏目とニャンコ先生は青ざめる

「「待ったあああっ!!」」

ガシッ!!

「!？」

思わずしがみついて止めてしまった。

「ちょっとつあなた何しようとしているんですか!？」

「あー夏目私の説明不足。後にするんじゃないかった。」

月詠は苦笑いしながら説明する

「あのね。父上のその刀は私のお爺さま・闘牙王の牙から作られた
天生牙って言って癒しの刀なの」

「癒しの刀？」

「これが一回だけ蘇らせれる力の正体よ。」

真に人を慈しむ心があれば一振りで百人の命も救える程なの。」

「ひゃ・百人」

「この世の人は切れないし大丈夫だから安心して」

「本当にそうなのか？」

ニャンコ先生はまだ疑っていたが

殺生丸はさらりと言った

「・・・・・・・・邪見は真つ二つに切られたが生き返ったぞ・・」

「ええっ邪見初耳よっ」

「はいっ本当にうれしゅうございました」

とにかく本物だとわかった

そしてとうとう天生牙で妖鳥のそばの何かを切った。

夏目たちは何を切ったかわからないままだが

すると

「・・・・・・・・う」

目を開けてくれた

「よっ・・よかった君大丈夫？わかる？」

夏目の問いに妖鳥は笑顔でこくりと頷いてくれた。

「父上っありがとうございます！」

「本当にありがとうございます!!」

「・・あ・・あ・・りがと・・」

「お主なかなかやるな」

夏目たちのお礼に殺生丸は

「娘の願いを聞いただけだ。

・・・月詠、祖母がたまには里帰りして一緒に茶を飲もうと言って

おったぞ」

「ふふっ・・・わかりました。この辺りで評判の七辻屋の饅頭をお土産に

里帰りします。お茶の時は父上もご一緒に・・・」

母親ゆずりの笑顔で笑う月詠に殺生丸は

「・・・ふっ・・・甘いものは苦手だな」

微笑程度だがほんの少し笑ってくれた。

邪見はありえないことに怯えていたが・・・

殺生丸達が帰る時、夏目達は見送りに外に出た

「邪見・・・帰るぞ」

「はいっただいま」

するとその時だった。

殺生丸の目が紅くなり顔もどんだん犬になっていく

そして最後にはバカでかい妖犬の姿になった

「なんだこれはーーーーー!？」

私よりでかいではないかーーーーー!」

ニャンコ先生はショックを受けたように叫び

「・・・でか」

夏目はただただ呆然

「きゃーーーーーっ父上かっこいいーーーー!!」
娘の月詠は興奮ぎみに叫ぶ

「父上ーーーー邪見ーーーー」
道中気をつけてーーーー!!」

月詠の声に殺生丸は頷き、しがみついてる邪見は手を振り、
空へ空へと去って行った。

妖鳥は回復したが片羽のまま……だから八ツ原の中級たちに頼
んで
そこで暮らす事になった。

「夏目っニャンコ先生っお婆さまからのお土産食べましょ?
この匂いは私の好物の菓子ね!」

「何いっ!? 夏目! 茶を入れろっ茶!!」

「はいはい……月詠ありがとう……あの子を助けてくれて」

「ふふ……父上呼んだだけだよ。夏目だってお願いしたじゃない」

「ははは……」

妖鳥を助けられて嬉しそうな夏目と月詠だった。

ちなみに菓子は最高級練りきりで見た目も見事な細工であり、

夏目は食べづらかったという。

第21話 雛かえる

今日、月詠は夏目の家に遊びに行った。すると門の前に誰かがいる。

でもその人は消えた。妖だったのだろうか……。門には式と書かれていた。

夏目に聞いてみるとそいつの主は今、夏目たちがかえそうとしている卵の雛を食べたいと言っているそうだ。

でもその妖には悪いがこの卵は生きている
もう少しだけ生かしてあげたいそうだ。

ピシ・・・ピシ・・・

「・・・あっ」

「せ、先生、月詠 卵が」

「生まれるわっ」

「何！？ヒヨコヒヨコ」

カッ

ぱりんっ

「「!!」」

もぞ

夏目は覗き込む・・・雛は角がはえた人がたの赤ちゃんみたいだった。

「「「!!?」」」

思わず衝撃が走った。

だってヒヨコみたいな感じかと思いきや人がただから……

「くしゅん」

「あ」

くしゃみした。裸だから風邪をひいてしまう。

バタバタ

「わー産湯産湯」

「わータオルタオル」バタバタバタ

「きゃー着物着物」

バタバタ

「ねえ夏目いらぬ布と裁縫道具とかある？」

「ハンカチと家庭科で使った裁縫セットだったらあるから」

「わかった」

とりあえず雛は目玉親父のようにお椀で産湯に入れられた。

ニャンコ先生曰く角から見て辰未の雛だそうだ

雛は最初に見た生物に変化するため、今回人がたになったのだ。つまりニャンコ先生が先だったら招き猫型、月詠だと人がたに犬耳になる。

「まあともあれ無事生まれてよかったな」

夏目はタオルでごしごしと雛の体を拭いてあげると雛は笑ってくれた。

「夏目、着物できあがったよ。」

「ありがとう。」

雛に月詠お手製のハンカチ製着物を着せてあげる。

「よし、こんなもんなな」

「ふふ・・・かわいいっ似合ってるよ。」

嬉しいのかニコニコ笑ってくれた。

夏目と月詠もニコニコ笑ってしまう。

今日から雛の育成日記をつけることにするわ

雛は意外と器用だったわ。紙で壺のような巣を作ったの。

夏目と私を引っ張って入ろうってやっていた。それがかわいかった。私たちが小さかったら入ってあげれるのに残念。

ちなみにニャンコ先生は怒っていた。読みかけの経済新聞なるものを材料にされちゃったらしい。

今日は情操教育のためぴくに行くに行ったわ。

雛は花とかに興味を示しているの。

でも数日でヒヨコサイズがハトサイズになった成長は本当に早いわ。雛はにこっと笑ってくれて私も夏目も思わず笑顔になるんだけどニャンコ先生は笑顔というより、にやり顔で雛も私たちもこわかった。

ニャンコ先生のデカくなったら巣から旅立つという言葉に

夏目が名前をつけてやらないと思ってたのにと呟いたが

ニャンコ先生が勝手に卵から生まれたからタマちゃんと呼ばれたらしい。

当然夏目は異議ありと怒る。私も安直すぎる思うわ。

少しずつ少しずつ大きくなったのにタマちゃんは衰弱していった。

ご飯をあまり食べなくなってしまったの。

「む？何やら妖が屋敷内に入ってきたな」

「この臭い・・・鼠ね」

現れたのは鼠の文字を崩して書かれた傘を被った僧侶のような妖だった

ニャンコ先生は猫じゃらしで鍛えた右フックでと言いかけたその時彼が投げた札で貼付けにされた。

そのスキに夏目と月詠はタマを連れて逃げる

しかしすぐに追いつかれてしまった。

ガッ

ザザッ

「う・・

鼠は人間は所詮非力な者、妖は災いにしかならんと言った
その言葉に月詠は切れた

「うるさいっ！！あなたに何がわかる！！たしかにわるい妖もいるけどね！！」

人を愛する良い妖もいるの！！だから半妖の私が生まれたの！！
そんなこと言わないで！！」

その時タマが成獣になったのだ。

姿は竜より鳥に近かった。そしてタマは鼠を噛み付く
我を忘れてしまったのだ。

タマはフーフーと息が荒い。

しかし夏目と月詠が優しく撫でた。

「帰ろうタマ」

「タマちゃん帰りましょう？」

タマの脳裏には今までの楽しい日々

「帰ろう」

タマは自らの背中に夏目たちを乗せ空を飛ぶ

夏目は悲しかった昔を話して上げた。

夏目たちをおろすとタマは遠くへ旅立った

鼠はまた卵を探すそうだ

あの日夏目が鯛焼きがたのおむれつなるものを作ってくれた。

鯛の形の卵焼きでおいしかった。

第22話 春に溶ける

今日夏目たちは強打した腰に効く薬草をとりにニャンコ先生に連れられて

しばの原に来た。

そこにはかつて二体の守り神を模した石像があったが、

今は一体の石像だけがある。そして辺り一面雪景色、足跡もないのだが・・・

ニャンコ先生が躊躇なく足跡つける

こうして夏目、月詠、ニャンコ先生、阿吽の強制的雪合戦が開始された。

一通りやった後夏目と月詠は雪玉や雪兎を作った。
その時後ろの石像から何かが現れる

「おや・・・人の子私の姿が見えるのか
・・・丁度良い私を移す依代が必要だったのだ。」

影は夏目に襲いかかったのだが

夏目が避けたので後ろの雪兎に

どんっ

「「「あっ」」」

入ってしまった。

雪兎に入ってしまった妖はショックを受けたように声をあげるが
この際いいかと自分のことを紹介した。

彼の名前は玄。石像に宿る妖だそうだ。

彼は三日前に切られた魔封じの木に封じられていた奴を
放ってはおけないと言った

夏目と月詠は感じる。

これは悲しみと憎しみだった

しかも玄の相方はどうしたのかという相方・翠は粉々に砕けてし
まい

玄はひとりぼっちなのだ。

次の日月詠は玄のことが心配になって夏目の家に行ってみた。

「あ、いらっしやい月詠様」

「え?・・・うさぎ耳・・・雪の匂い・・・玄?」

「ああ

体がなじんだので短時間だけ本来に近い姿になれるんだ」

「あーなるほど　なんか父上たちとは逆ね。

父上たちは普段は人間の姿だけど本来の姿は化け犬だから」

「へーそうなんだ」

すると支度を終えた夏目たちが現れる。

夏目のクラスメイトが言うには森林公園が三日前くらいから枯れ始めたらしい。とりあえず行ってみることにした。

進む度に腹を喰われた魚が落ちていた。草木も枯れている。

さらに進むとボロ屋があり中から何か感じられた

中を覗くと玄は誰かの匂いを感じ走った。

その瞬間だった。

ガタンッ

「「!」」

悪霊が現れた。

悪霊はゆるさない　ゆるしないと恨めしそうに言う

夏目に襲いかかろうとしたとき

玄が身を挺して止めた。

彼は悪霊を抱きしめながら言った。

「これが翠なんだ」

翠が暴れたため逃げられた。

玄は悲しすぎる話をする

彼らは森を守っていた。

だがある日作物が取れなくなり、村人達は拝みに来た。

でも玄と翠は祓い神、畑を潤すなんてできない。

近くを通りかかった妖に聞いたり、邪気を祓ったりした。
なのにできなかった。

人間たちは彼らのせいにし、玄は獅子と呼べぬ形になり

翠は谷底へ落とされ砕け散った。

彼女は悪霊になってしまった。

あれから聞き込みを収獲は無かった。

とりあえず今日は遅いから夏目の家に泊まらせてもらった。

しかしその日の夜、玄も悪霊になりかけた。

彼は友人帳に加えてもらって 何かがあったら止めてと言ったのだ

「ひとりはもう嫌だ」

悲しい声だった。

夏目と月詠はひとりじゃない おれ達がいると励ます

でも玄は自らを役立たずだと言った

夏目と月詠は言ってあげた

「玄は人を嫌いかもしれないけどおれは玄が好きだよ」

「私も翠のためにがんばる玄が好きだよ」

「虹に願おうとしてくれた翠のことも好きだよ。」

「だからそんなこと言わないで・・・ね・・・」

玄は二人のやさしさにふれて涙をポロポロ流した。

たくさん泣いて小さな雪鬼の姿に戻った。

第23話 春に溶ける

数日後 翠らしき影を見つけたという情報が入った。

夏目達は急いでその場へ向かう。

封印する方法はただ一つ、玄が翠を抱きしめ放さなければ二人ともあの石像へ帰れるそうだ。

不確かな方法・・・でも玄の覚悟は本物だ

そしてとうとう翠を見つけた。

しかし翠の攻撃により玄はコロコロ転がって行ってしまった。

しゅるしゅる

「！ 逃げる」

「待て」

夏目と月詠は逃げようとする翠を掴んだ。しかし火傷するかもしれないぐらい

熱かった。でも二人は放さなかった。

たとえニャンコ先生が放せと言っても

「だめだ ここで逃がしたらまた」

「玄と翠のためにも放せないわ」

「先生 玄を 玄をここへ・・・」

すると二人の中に翠の記憶が流れ込んだ

また願いを叶える三色の虹が出なかった

早くまた雨降るかなとつぶやく翠

玄は雨は寒いから嫌だと言う。

そんな彼に翠は微笑みながらあなたがいるから寒くないと言ったのだ

「さむい

さむい

さむい

「さむい」

その翠が寒いと言っている。寂しそうに．．．悲しそうに．．．

ニャンコ先生が強制的に夏目達を剥がそうとしたその時だった。

玄が翠を抱きしめた。

ನಿಜಕ್ಕೂ

「さむい さむい さむい」

そんな彼女に玄はやさしく言ってあげた

自分も寒かった、一緒に帰ろうと・・・

「君の心がいつか癒えたら　また二人で虹を待とう
私も翠、幸せだったんだよ」

玄の体が消えて行く

でもその時　翠が涙を流し、一緒に消えた。

「さようなら

さようなら

夏目様

月詠様」

その後夏目達は玄と翠のために三色の虹のかわりに
花の種を植えることにした

三色の花をしばの原に・・・・・・・・

二人は喜んでくれるだろうか

第24話 温泉へ行く

「うっわー~~~~~っ」

月詠と阿吽の耳に悲鳴が聞こえた。しかもこの声は夏目だった。急いで行ってみると青ざめて座り込んでいる夏目がいた。

「夏目、どうしたの。何かあった？」

「……………あー神輿を担いだ小さい妖が水たまりを通りたがっていたから

そばに落ちてた板で橋を作って通らせてやったんだ。

神輿を何気なく見ていたら風が吹いて、中身が見れたんだんだけど……………

三つ目の頭蓋骨だった。……………」

「……………衝撃的な光景だったんだ。」

夏目は家に帰る。月詠たちは異空間の術で作った樹木の寝床に戻った。

見た目は樹木にある、ひと一人入れる穴だが、

中は月詠の術で六畳ぐらい広いのだ。

布団は……………さすがに無いので叔母であるかごめがかつて使っていた

寝袋を参考になっている。月詠曰くけっこう役に立っているそうだ。

しばらくすると阿吽の片方の頭が覗いて来た。

「ん？どうしたの、阿吽？」

月詠は顔を出してみると夏目、ニャンコ先生、何故か名取と匂いがした。

疑問に思いつつ呼んでみることにした。

「おーいみんなー、こっちこっちー」

「あっ月詠」「むっ何で木の中から・・・」 「やあ月詠ちゃん」

三人はここに來た理由を月詠を話す。

実は名取が芳香剤の懸賞で温泉が当たり、友人である月詠たちを誘っているのだ

「温泉かーいいなー」

「行くかい？」

「阿吽連れていいのなら行きますっ」

月詠は即答だった。

こうして夏目たちは藤原夫妻の許可のもと、温泉旅行に行く事になった。

「ところでなんで木から出て来たんだ？」

夏目の何気ない問いに名取とニャンコ先生も疑問に思う

「そういえばそうだな」

「どうしてだい？」

「術で穴の中を広くしたんですよ。」

覗けば解るという月詠。言われた通り三人は覗いてみると

「「わーーーーーーーっっ」」

意外と広くて驚いたという。

第25話 温泉へ行く

まず電車に乗るのだが、名取は俳優。

そのため乗り合わせた周りの女性達はヒソヒソと話しながら顔を赤らめる。

夏日はあきれ顔・・・月詠は普通にお隣に座っていた。

「・・・・月詠は名取さんを見て黄色い悲鳴あげないな。」

夏目は小さな声で聞いてみる。月詠は

「んー私からすれば父上が良い。強いし、カッコイイし。」

「えっひどいな。月詠ちゃん」

次はバスに乗る。当然、女性に赤らめた。

バスから降りると少し歩きになる。

しばらくしてようやく到着した

出迎えてくれたのは旅館の美人女将さん。彼女の案内で部屋に行くのだが

阿吽はさすがに部屋に入れないのでロビーに

名取はマネージャーに旅の事を連絡するのを忘れたらしく電話することになった。

とりあえず夏目達は先に部屋に入る事になった。

その部屋は窓からの景色も最高の良い部屋で

夏目達は思わずゴロンと寝転がる

「疲れたけど気持ちいいな」

「たまには遠出もいいものだな？」
「景色もキレイだしねー？」

するとカタカタと押し入れから音が聞こえた。何だろうと思い開けようとしたが

名取が来た。そして温泉に行こうと誘う。

月詠は阿吽を連れて温泉に入った

「あゝいい湯♪ねえ阿吽あなたもそう思うでしょ？」

「♪」

阿吽も気持ち良さそうだ。

ちなみに男湯は騒がしかった。

後から聞くとニャンコ先生が一番風呂してたり、女である柊が覗き込んでいたそうだ。

部屋に帰る途中、夏目が何か驚いた。妖がいたらしい。

名取は館内を一周してくると一旦離れた。

夏目の話では人のような妖が首つり死体のごとくぶら下がっていたようだ。

何気に怖い。

また押し入れの中からカタカタ音が聞こえた

開けてみると切れかかった紙が貼ってある蓋をした壺

丁度妖をみたのは真下という事もあり見ないようにした

ニャンコ先生はラッキョウが詰まってるかもというが
そんな話に乗らない。

すると丁度名取が帰ってきた

夏目は先ほどの気になることを話すがせっかく旅行に連れて来てく
たから
気を煩わせることでは・・・と話す

名取は理解してくれたのか

「今日くらい妖のことは置いておこうか」

夕食は騒がしかった。

柊が名取に夏目はがりがりだから肉を喰わせてと言ったので
名取と月詠は自分のあげようかと差し出す。

夏目はショックを受ける

ニャンコ先生は酒が入りつまみにするぞーとよっぱらい
名取はきらめきオーラで笑っていた。

しかも驚いたことに月詠も普通に酒を飲んでいる。

こうして就寝

月詠はぐっすり寝ていた。夏目と名取はほんの少しだけ話して眠りに入る。

しかし

その夜事態は動いた

第26話 温泉へ行く

夜 夏目が夢でうなされた後、みんなは二度寝することになった。
しかしだった。

カタカタタ

ごんっ

押し入れの壺が開いたのだ。

「！ せ 先生 月詠 名取さん」

だしだし

「・・・んー？」 「なーに？」

夏目は慌てて皆を起こす。でも三人とも眠たそうだ。

急いで壺が開いた事や物音がした事、今勝手に蓋が開いた事、

それに嫌な気配が流れた事を話す。

押し入れを開けるとやはり壺は開いていた。
蓋に貼ってあった紙には封の文字があった。
やはり何かを封印していたのだろう。

夏目と月詠、ニャンコ先生は下の階に行ってみた。

途中でニャンコ先生は言う。

あの封印は最近のものだと・・・

すると夏目達は気づく。 目の前に首つり死体のごとくぶら下がった妖、

その妖がずずず・・・降りて来たのだ

「「!?!」」

その光景に夏目と月詠は青ざめる

ぼたりっ

「「ぎゃーーーーーーーっっ」」

それほど怖かったのか落ちて来た妖の姿に夏目と月詠はニャンコ先生を間に挟み、お互い抱きつき叫んだ。

この妖は血が出ていた

「なかなか大物よ、夏目」

「食ってもいいか 夏目」

「先生・・・」

「・・・え？夏目？」

妖は夏目の名前を聞いた瞬間がばっと抱きつき、名前を返してと懇願した。

その勢いでニャンコ先生と月詠は気絶する。

妖・スミエはこの地に住んでいたが人間に邪魔だと壺に封じられたそうだ。

名前を返してくれたら山奥に消えると彼女は言った。

夏目はスミエに名前を返す。しかしそれがいけなかった。

だまされたのだ。

夏目と気がついた月詠、ニャンコ先生は寸での所で来てくれた名取とともに

逃げた。

そしてある部屋に入る。・・・妖封じの陣だ

夏目達はお互い話さなかったのだ

「手伝います 今回のことは自分が甘かったんです。」

「ありがとう」

ちなみに

ニャンコ先生、月詠、柊は別室で待機することになった

後から夏目に聞いたのだけど、あの妖はとても速く束縛用の術なんてすぐにすり抜けられたらしい。もうだめかと思った時

三つ目のちがう妖が助けてくれたみたい。

その妖は夏目が話してくれた小さな妖が運んでいた三つ目の頭蓋骨だったらしい

彼はスミエを連れて行き、清めてくれるそうだ。

翌日夏目たちは旅館のチェックインをすませた。

「お待たせ 悪かったね また まきこんでしまった」

「いえ 本当に楽しかったです。」

「懲りずにまた、たまには会ってくれますか？」

その問いに名取は頷く

「ああ もちろん」

その言葉に夏目と月詠は笑顔になった。

「さあ帰ろうか」

「はい」

第27話 桜並木の彼

最近夏目の部屋では変なことが起きていた。

とある絵を飾ってから毎朝毎朝枕元に花が散らばっているのだ
当然ニャンコ先生じゃない

とりあえず今夜は徹夜しようと夏目は思っていた。

「夏目、どうしたの？なんか最近花の匂いがするんだけど・・・
？」

月詠は夏目達についた花の匂いについて聞いた。

「・・・あー・・・実はな・・・」

夏目は事情を説明する

「絵を飾ってから花が散らばっているかー・・・
小さい頃叔父さまと叔母さまが言ってたなー

戦国時代に妖の力を増大させる四魂の玉がかけらになってしまい

邪心を持つ絵師が、四魂のかけらと血と墨で描いた妖怪を実体化させたって」

「四魂の玉って？」

「さっき言った通り妖の力を増大させる宝玉よ。

悪人など邪心を持った者なら黒く汚れ、清い心の持ち主だったら浄化するの。

妖が取り込んでしまったら

たとえば体をバラバラにされてもすぐに蘇ってしまう。

たとえひとかけらでも死者も蘇ったり、足につければ速さも上げる程よ。」

「しかしそれは消滅したと聞いた事があるぞ」

「そうなのか？」

「詳しくは聞かされなかったけど・・・本当のことよ」

こうして夜になった

三人は布団をかぶって見張る。そしてなぜかニャンコ先生は網を用意していた。

妖精だったら捕まえたいそうだ

その時だった

カタ・・・

・・・カタ
カタカタ

天井から音が聞こえた

見ると天井の板を一枚少しずれており、そこから右腕が伸びていた。

その腕からひらひらと花が落ちてくる。

すると腕は少しずつ腕で板をずらしていく

現れた顔はにたり笑顔のお面をかぶった妖だった

「う」

「（うっわーーーーーっ）」

「（きゃーーーーーっ）」

ニャンコ先生は頭突きを喰らわせる。それが効いたのかぼとつと落ちた

落ちて来た妖が言うにはあの人に捧げた花だそうだ

あの人とは夏目達の後ろに飾ってある冬の桜並木の絵

よく見たら小さな人影があった

八坂様といってこの絵に住んでいるらしい

返してもらおうと壁から外そうとするようだが

何故か外れなかった

三人掛かりでも外れない

仕方が無いので妖、名前は巳弥は翌日も来る事になった・・・・

第28話 桜並木の彼

それからというものの妖・巳弥は毎日毎日夏目の元に来た。
ある時は花を吹雪の如く部屋に散らしたり、
またある時は蛙を捕まえてきたこともあった。
でもそれは花と生き物が好きな八坂様のためだった。

そんなあの日、月詠と阿吽は夏目の元に行く。
すると途中で綺麗なレンゲ畑を見つけた。巳弥はこんな風景を見ながら
旅をしたのかなと思った。

月詠は巳弥と八坂様のために少し摘んだ。
しばらく歩くと巳弥が居た。

「あっ巳弥」

「む？月詠か！今日は早咲きの桜を持って来たのだ」
そう言いながら巳弥は小さな枝に咲いた桜を見せた

「そっか実はね、さっき綺麗なレンゲ畑があってね
巳弥と八坂様のために少しだけ摘んだの」

月詠は巳弥にレンゲを差し出した

「いっ・・・いいのか？」

「きつと八坂様も喜ぶよ」

その言葉にジーンとくる巳弥だった。

そして二人は夏目の部屋に入る

「夏目、昨日はありがとう 今日月詠が摘んでくれたレンゲと早咲きの桜を持ってきた・・・」

「ぎゃーアホナツメなにやっとなるーっっ」

「ぎゃー!? 夏目」

「きゃーー!? 夏目ーーーー!!」

そこには慌てているのと怒っているのを足して2で割った感じのニヤンコ先生と

倒れ込む夏目。月詠と巳弥は慌てて駆け寄る

「夏目しっかりしてーーーー!!」

「大丈夫か!? 一体どうした・・・」

巳弥は絵を見ると絵からなんと根が張り巡らせていた。

それを見た巳弥はレンゲと桜を落としてしまう。

少しして夏目が目覚めた。

巳弥が長年持ち歩いていたため妖力を持ってしまい、

そして夏目の力を吸い取って成長したのだろうか……
巳弥は妖力を使って燃やすと言った
しかし夏目は外す方法を探そうと言った

それからいろんな妖に聞いてみた。しかしいした進展は無かった。

「すまない……」

巳弥は謝る。

すると月詠は……

「……あのね巳弥あなたがあの絵を大切に思う気持ち……
私もよくわかるよ」

「え」

「……これ見て」

そう言いながら懷から一枚の紙を差し出す。
それには月詠とよく似た人間の女性が描かれていた。

「これは……もしかして」

「母上……父上は犬妖怪、母上は人間だね。
生命力の違いのせいか……昔死んでしまったの……」

「・・・・・・・・そうだったのか」

巳弥は月詠の母の絵を見る。すると

にこ・・

笑った

「ぎゃーーーーーっつ

笑ったーーーーっ!?」

「そりゃあ妖力の高い妖怪絵師が描いた絵だからほんの少しだけ笑うよ

・・・・・・・・だからね私は母上がこの絵の中で生きているみたいに思うんだ」

「・・・・・・・・」

あれから進展の無く根はどんどん広がり、夏目はゴホゴホと咳き込むことが多くなった。

「月詠 私は決めた。絵のせいで夏目を殺すぐらいなら燃やすよ」

「・・・・・・・・そっか」

「でもせめて木を桜で満開にさせたいから
絵の具と筆の用意手伝ってくれるか？」

巳弥のお願いに月詠は当然のごとく手伝った

そして絵の具と筆をそろえた後、夏目の元へ行った。

絵の木を満開にしたいという願いに

夏目も喜んで手伝う。

夏目たちはどんどん塗っていった。

身長の高い巳弥は上の辺りを

夏目と月詠は真ん中

ニャンコ先生は下 肉球でペタペタと塗った

「うまいなー月詠は」

「これは絵の先生に習ったんだ。ここを濃く塗ればらしく見えるよ」

「「「おー」」」

思わず感嘆の声が上がった

しばらくしてようやくできあがった

「ふふ」

絵の花びらは四人で描いたため個性があるけどとても奇麗だ。

「「で・・・出来た」」

「夏目、月詠」

さすがに疲れたのか倒れるふたり

「・・・きれいだね巳弥」

「巳弥 八坂さまはね・・・」

「ありがとう夏目 月詠 おやすみ」

夢を見た・・・満開の桜並木

少々いびつな桜、近くには奇麗な桜

多分夏目と自分が描いた桜だ

こっちは巳弥でこっちの肉球はニャンコ先生だ

つまりここは絵の中

すると木にもたれ掛かっている一人の青年が何かに気づく

青年はうれしそうに桜の花から伸びる腕に手を伸ばした。

そこから現れた巳弥は青年八坂様に抱きつく

現れた拍子でお面は取れたが顔はかくれて見えなかった。

でも表情は解る気がする。

だって八坂様がうれしそうに笑っていたのだから

夏目と月詠が目を覚ますと伸びた枝と描いた桜、
そして絵の中の八坂様は居なかった。巳弥はその日以来訪ねてこなかった

きっと八坂様の夢だった旅に一緒にでているといいなと
月詠は思った。

第29話 呼んではならぬ

先日夏目達は友達と合宿に行ったらしい。

しかしそこにはレイコさんと勝負して友人帳に名前がある人魚が居たそうだ

行く先々にも契約したんだなあと思う。

そしていろいろあったけどなんとか名前を返せたって・・・

笹舟といういい名前だった

今日は大入道が歩いていて ずしんずしんとうるさい。

私は犬だから余計にうるさく感じる。

阿吽と一緒に出来る限り離れるとようやくマシになった。

するとふと足下を見ると陣が描かれていた。分かりやすくいえば

中心に大きい一つ目の陣だ。何かなと阿吽と共に乗ってみたら

「ねっ・・・ねえ君たち妖怪？」

おそろおそろ話しかけたのは帽子を目深にかぶった女の子だった。

「・・・え・・・えーと私は半分犬妖怪、半分人間の半妖だけど・・・

・・・

君だれ？」

「わっ私は多軌 透・・・」

「タキちゃんね、私は月詠。こっちは双頭竜の阿吽っよろしく！

ねえタキちゃん、これタキちゃんが描いたの？」

「……うん。これは妖を見るための陣なの……」

タキは事情を話した。

この陣は亡くなった祖父が残したらしくよく庭に落書きしていたそう
うだ。

そしたらある時、この陣の中に妖が見えるようになったのだ。

タキのご先祖は陰陽師みたいなことをしてたらしく

祖父は妖を見てみたいと憧れていたらしい。

彼女は嬉しくなり時々こうして遊んでいた。

ある時陣を大きく描いてみた。

それがいけなかった。

大きな妖を見ただけなのに呪いをかけられたのだ。

360日以内に捕まえば見逃してもらえるみたいだが

できなければタキは食べられてしまい

彼女が最後に名を呼んだ人間から十三番目までの人間を食うと言っ
たのだ。

そして期日は近づき、タキは陣をたくさん描いて探していたのだ。

「そうだったんだ……ただ見ただけなのに……」
「……うん」

「私も手伝うよ。一人より二人よ!!」

「えっいいの？」

「うんっ陣に入らなければ見えないでしょ？」

私が代わりにその妖のことをいろんな妖に聞いてあげる」

「あっありがとう」

「でもその代わり呪いが解けたら　たくさん私の名前呼んでね、絶対だよ？」

「うんっ」

タキは久しぶりに笑顔になった。

「とりあえずその妖の特徴教えて？」

「わかったわ。陣に入った妖に見せるために描いた似顔絵があるの」
そういつて絵を見せた。絵は・・・こわいがツユカミさま並に微妙だった

「・・・・・・特徴はひたいの傷ね。」

「そうよ」

とりあえず月詠と阿吽はそれをたよりに探すことにした

しかしだった。

陣を描いてるタキが誤って夏目の名前を呼んでしまったのは後から知った。

第30話 呼んではならぬ

夏目達もタキの祟りを解くために例の妖探しに協力してくれた。しかし期日まで隠れているのか全然見つからなかった。

とりあえず夏目とニャンコ先生は池の辺り

タキは河原を探していた。

月詠はタキから教わった陣を描きながら探す。

たくさん描き上げるとタキが歩いて来た。

「あつタキちゃん」

「あつ………あぶないあぶない……」

そっちはどう？見つかった？」

月詠の名前を言いかけたがなんとか言わなかった。

そして見つかったかどうか聞くタキ

「………全然」

月詠とタキはガツクリと肩を落とす。

二人は場所を移動するためとぼとぼ歩いていたらニャンコ先生が横を走っていた。

「どうしたの？そんなに慌てて……」

「何かあったのニャンコ先生？」

しかしニャンコ先生は二人に気づかずガザガザと何かを探していた

「・・・何か探している・・・？」

そして二人はそばに夏目が居ない事に気づいた。
二人は急いでニャンコ先生の元に走る

「ニャンコ先生ーっっ」

「猫ちゃーっっんっっ」

「むっ月詠とタキか。夏目のやつが居なくなった。もしや例の妖かも・・・」

「・・・猫ちゃん喋れるの？」

「しまったーっっーっっっっ」

「・・・ニャンコ先生・・・」

月詠は呆れるしかなかった

「私はニャンコ先生と夏目達に呼ばれとる。この猫の姿は依代の招き猫で

本来はとても美しい姿なのだっ!!」

「ニャンコ先生・・・」

「あ」

「あーっっーっっっ阿呆がっ」

「きゃーっっごめんなさい!!」

ニャンコ先生までも対象になってしまう可能性大になった。

とりあえず月詠達は急いで夏目を探す。

「あっちから匂いがするんだけど」

「そうか・・・夏目ーーーーー」

「夏目殿」

「返事して夏目ーーーーー」

「あいつ一体どこへ・・・」

「待ったニャンコ先生っ！！
がっ

「ぐお」

なんと横から走って来た夏目に腹を蹴られてしまったのだ。

「先生・・・」

「夏・・・」

ゴロゴロ

「「うわああああ」」

「「わーーーーー二人共ーっ」」

夏目達は坂を転がり、月詠たちは慌てて声をあげた。

夏目は奥の洞窟で例の妖に会ったそうだ

タキは自分のせいだと謝ろうとするが夏目は今は悩むなど言ってくれた。

しかし夏目は例の妖に目をなめられたせいで妖であるちよびひげや、妖の血が流れている月詠が見えなくなってしまったのだ。

夏目と月詠はこんな時に・・・と

タキはあきらかに巻き込んだ・・・とがつくり肩を落としたニャンコ先生には役立たずが二倍と怒られてた。

こうしてますます例の妖捕獲の困難度があがった。

第31話 呼んではならぬ

翌日夏目たちは合流した。

やはり夏目の目はまだ治ってないし、タキは徹夜で陣を描いた様だ。今回はニャンコ先生も特別に手伝ってくれるそうだ。

その後ニャンコ先生大好きのタキとある意味睨み合いになったが・

すると夏目が

「月詠・・・そこにいるのか？」

「えっいるの？」

夏目とタキの問いに月詠は答える。

「うん、ここにいるけど・・・やっぱり見えない？」

「ああ」

その言葉に月詠は考える。

「・・・うーん、本当は人前でやっては駄目だけど・・・二人は妖は見えるし・・・やるか!!」

「えっ何するんだ!？」

「えっ?えっ?」

夏目は月詠の言ってる意味がわからないし、

タキは聞こえないため何が起こるか困惑する。

するとどうだろう・・・

月詠の妖力がどんどん抑えられていくのだ。

そしたら半透明だが月詠の姿が見えてきたのだ。

「すごーいっ!!」

「半透明だけど見える・・・」

「なるほど・・・半分人間だから・・・人間に近い程妖力を抑えた訳か」

ニャンコ先生は納得する

「うん、だから人前でやったら絶対驚かれるんだー」

「はははは・・・」

とりあえず夏目達は場所を移動しながら例の妖について話す。
噂では捨てられた割れ鏡が禍々しい気を集めて妖になったそうだ。

「そこでこの私が超特別に飲み仲間から魔封じの鏡をもらってきたぞ」

そう言いながら自慢げに魔封じの鏡を見せるニャンコ先生

三人は思わず

「！！　すごい！」

「どうしたんだおれ、先生が頼もしく見える」

「私もっ！目にゴミ入ったのかな」

とにかくこの魔封じの鏡に封印することになった。
後は相手の姿を見るため陣に誘い込めば可能になる。

「何とか私を餌にできる方法はないかしら」

「タキ・・・」

「タキちゃん・・・」

しかしそんなタキにニャンコ先生はひどい事を言った
夏目なら餌にできるぞと

「（美味そうなおい！？）」

「（私はまずそうってこと・・・？）」

二人はガーンとショックを受け月詠は思わず二人の肩をぽんと軽く叩いた。

さらにニャンコ先生は「友人帳」の「夏目」だと気づいているだろ

うと続けた。

「お前は特別だからな。」

「特別？「友人帳」って……？」

疑問を浮かべるタキ

夏目は思わずビクッとなった。

だって数少ない仲間なのに……と

「……悪い……詳しくは話せないんだ　ちよつと厄介なもので・
・

でも……祖母のたったひとつの遺品なんだ……」

その言葉を聞いたタキは何か心情を読み取ったのか
笑顔で言ってくれた

「そう……じゃあ夏目くんの宝物なのね」

夏目は目を見開く……だって友人帳を見た親戚は皆落書きだとか
レイコはやっぱり変わり者だって言ったのだから

だからすごくうれしかった。

「うん……そうなんだ」

夏目は本当に嬉しそうに笑った。

そのときニャンコ先生と月詠は何かに気づく

ばしんっ

「ぎゃっ」

「きゃあっ」

「!?!? わ!?!? 先生っ月詠!?!?」

しかし二人はゴロゴロ転がりガラツと落ちてしまった。

例の妖が来てしまったのだ。

崖下

「う・・・うゝん あっニャンコ先生しっかりしてっ」

月詠はそばで気絶しているニャンコ先生を起こす。
ちなみに彼女は先ほどの衝撃で元の妖力に戻ってしまったようだ
また彼らには見えないだろう・・・

「お・・・おのれデカ物め・・・」

「とにかく夏目たちがあぶないから早くっ」

月詠に急かされてニャンコ先生は本来の姿になる。

そして月詠を乗せて夏目たちの元へ走った

少し行くと夏目が倒れていた。体を動かそうとしているが
痛みで出来ないみたいだ。

さらに奥にはタキと妖が対峙していた。どうやら陣に誘い込めた様

だ。

ザザザザザザザザザザザザ

ふわり・・・

夏目の周りに風が吹いた。そして体が羽のように浮く

「・・・先生？月詠？」

「う・・・」

タキは妖に首を絞められている。もう駄目かと思ったそのときだった。

ザザザザザザザザザ

ザッ

ザシュッ

ニャンコ先生の牙と月詠の妖刀「天響牙」でタキと妖を引き離した。

そして夏目は魔封じの鏡を掲げ呪文を唱える

「陰なる者よ 静かなる眠りに 光を見つけよ！」
妖の面目を鏡に映した瞬間だった

しゅるしゅる

「ひっぎゃああああ」

勢いよく魔封じの鏡に吸い込まれ
ドンッ

ようやく封印した

しかしだった

バタッ

「！ うわ夏目くん！？」

「あ、こら夏目しっかりしろ・・・」

「夏目？ 夏目ってば！？」

タキの祟りを解くことができたが夏目は妖の毒のせいではらく寝
込んだ

数日後元気になったらまた普通に妖が見えていたそうだ。

ちなみにタキはというと月詠の事を「月詠ちゃん」と笑顔で呼んでいた。

月詠も笑顔で答えていたそうだ。

第32話 里帰り

家に災いを起こすカリメという妖騒動から数日がたった。月詠は阿畔とともに何故か饅頭で有名な七辻屋のそばでうろうろしていた。

「（何してんだ？）」

丁度通りかかった夏目は疑問に思う。
すると月詠は夏目に気づいた。

「夏目っ丁度良かったお願い！私の代わりに饅頭を買って！！」

「え！？」

事情を聞くと月詠は今日、里帰りする様だ。
それでお土産に七辻屋の饅頭の買おうとしたのだが……
あいにく見えないので夏目をお願いした訳だ。

とりあえずお金を受け取るとさっそく買いに行った。
しばらくして夏目は饅頭が入った紙袋を持って帰って来た。

「ほら、買って来たぞ。」

「わゝ本当にありがとう。」

「どれくらい向こうにいるんだ？」

夏目の問いに月詠は考える

「うゝん。二、三日はいるかな。お婆さまに久しぶりに会おうし、父上にまた鍛えてほしいし……」

「そっか、それじゃあ気をつけてな」

「うんっ行ってきまーす！」

そして月詠はお土産の饅頭を大事に持ち、阿吽に乗って西へ飛んで行った。

月詠を乗せた阿吽はどんどん西へ行く。
途中何回か休憩を挟むが順調に進んだ。

そして夕方頃

「「「お帰りなさいませ月詠さま」「」」
たくさんの家来達が出迎えてくれた。

「ただいま皆、阿吽がさすがに疲れているからお願い。」

「承知しました。」

そう言って家来の一人が阿吽の手綱を受け取り、小屋へ連れて行く。

「お婆さまと父上はどうしているの？」

「ご母堂さまは首を長くしてお待ちしております。

殺生丸様は丁度執務が終わったそうです。」

「あの人も多忙ね……まあ最初にお婆さまに会いに行くわ」
「はっ」

ご母堂の部屋

「お婆さま、月詠です。」

「うむ、入るが良い。」

許可が入った。

「失礼します」

ススス・・・と丁寧に開ける月詠。そして奥には月詠の祖母であり、

殺生丸の母である通称・ご母堂様が座っていた。

「月詠元氣そうでなによりだ。ささ・・・早くこの祖母に元氣な顔を
見せてくれ」

「は・・・はい・・・」
そして近づく

「あゝよしよし幾つになっても孫はかわいいものだろう。
お前がいけない間少々元氣がなかったが今元氣になったぞ。」

「お婆さまくすぐったいです。」
頭を撫でるご母堂に月詠はくすぐったそうにする。
すると

「・・・・・・・・母上いつまでやっているか」
呆れた様子の殺生丸が入って来た。

「父上久しぶりです。先日はありがとうございました。」
「うむ」

「いいではないか久しぶりの孫との対面なのだぞ」
「・・・・・・・・・・。」

剣呑な空気が広がる。このままでは殺生丸の堪忍袋の緒が切れかね

ない。

月詠は慌ててお土産を取り出した

「お婆さま、父上実はお土産があるんです。とてもおいしいんですよ」

「おやそうなのかい」

「……………後でいただく」

とりあえず収まったので月詠は胸をなでおろした

「さあ、月詠。今日は宴だ。それまでゆっくり休むが良い。」

「はい。お言葉に甘えて失礼します。」

ちーん

月詠は母・りんの仏壇に手を合わせた。

線香をあげるのも久しぶりなのだから。

月詠は心の中で今までことを報告する。

新しい友達が出来た事……………いろんな妖との出会い等をだ。

「母上……………お爺さまが最期に残した「大切な者はいるか」という意味

なんとなくわかる気がします。……………わたしはもっと強くなって大切な者を守りたいです。」

そんな月詠の姿を殺生丸は離れた所で見守っていた。

そして夜騒がしいながらも楽しい宴が始まった。

「さあ月詠今日はお前の好物をたくさん作ってもらったからな」

「はいっありがとうございます。」

「殺生丸様、お酒をお注ぎします。」

邪見はそう言ってくれたのだが、

ごすっ

「いらん」

ひじで殴れた。

「そんな」

ショックを受ける邪見を尻目に殺生丸は

「月詠」

「はい」

「注げ」

どうやら娘の月詠に注いで欲しかった様だ。

「はい、父上」

月詠はとくとくと杯に酒を注ぐ

殺生丸は酒を優雅に嗜みながら言った。

「月詠……明日は久しぶりに手合わせをやるぞ。」

その言葉に月詠は

「はいっ」

うれしそうに答えた。

第33話 里帰り

翌日、月詠は朝食を食べ終えた後身支度を整える。

そして向かったのは父が待つ広い庭だった。

「・・・来たか」

「はい」

「良いか・・・正午の鐘が鳴る前に私から天生牙を抜かせてみる。
そしたらお前の勝ちだ。」

「はいっ」

殺生丸と月詠は睨み合う。

そして一気に間合いを詰めた。

「たあぁっ」

月詠は天響牙で攻撃するが殺生丸は ふわりと避ける

「くっ 飛刃月華！！」

飛刃月華とは天響牙の必殺技であり、三日月状の刃が無数に攻撃するものだ。

「ふっ」

しかし殺生丸は余裕の笑みを浮かべ、光の鞭で飛刃月華をたたき落とす。

そのおかげで地面は傷だらけだが・・・

そして今度は殺生丸が攻撃に出た。光の鞭で連打する。

「ぐっ・・・う・・・」

月詠は何とか天響牙を使って持ちこたえた。

「はあっ」

彼女は攻撃しようと走るが避けられてしまう。
やはり殺生丸は強い

天響牙で攻撃したり防いだりとそんな攻防の繰り返しでかなり時間がたった。

あと数分で正午の鐘が鳴る。

「はあ・・・はあ・・・」

さすがに息切れしてきた月詠。

「どうした、月詠もうお終いか」

その言葉にむっとしたのか

「お終いじゃなーーいっつ」

「!？」

一気に間合いを詰めた。いきなりのことにおどろく殺生丸。

月詠は横一文字に天響牙を振るう。

ガッ

ごーん

ごーん

ごーん

月詠の攻撃を抜きかけの天生牙で受け止めた殺生丸。

その直後正午の鐘が鳴り響いた。

「……あ……あの……」

「……抜きかけだからな。引き分けだ。」

だが……よくがんばった。これからも精進しろ」

「はいっ」

父親の言葉に月詠は嬉しそうに笑った。

残り二日祖母とお茶を飲んだり、家来の子供と蹴鞠したりと楽しんだ。

そして月詠が出発する時間がやってきた。

「お前がいなくなるとまた寂しくなるのう」

「しかないだろうが」

「邪見は寂しゅうございすう。」

「」「お氣をつけて月詠様」「」

「お婆さま時々文をお書きします。父上修行頑張ります。邪見父上をよろしく。」

一言多いから氣をつけてね。皆は父上達を支えてね。」

「」「承知しました」「」

「それじゃあ行ってきます！」

こうして月詠は阿吽に乗って出発した。

そのころ

夏目達はカイという妖に出会い大変だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513w/>

妖犬友人帳

2011年10月26日15時01分発行